宇田美津子

250年文庫

ごめんなさい　そして　ありがとう

宇田美津子

はじめに　4

私の歩んだ戦記／熊谷武三　10

お父さん　ごめんなさい　18

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻勃発　25

「心を見る学び」に出会う　31

「私の天変地異」すべてありがとうでした　36

プーチンさんへ　42

意識の転回　55
きちんと「意識の流れ」に向き合って書こう　59
本家の蔵から、満州事変・日中戦争時代の新聞を発見　62
プーチンの暴挙を止められない現実　70
私自身の不安と恐怖の正体　74
田池留吉の世界　78
「お母さんの温もり」がすべて答えてくれます　93
ようやくゴールまで来ました　101
おわりに　108

はじめに

こんにちは。

この本を手に取っていただいてありがとうございます。最後まで読んでいただけたらうれしいです。

私は今年七十三歳になる、岩手県の紫波郡紫波町という農業が主産業の自然豊かな町に在住している普通の女性です。普通と言えば、この年代の女性だったら夫や子供、孫たちがいて、まだ多少体力・気力が残っているから趣味や家庭菜園などを楽しんでゆったりと暮らしているという形が一般的かも知れません。この基準からすると、私は現在一人暮らしで、本文に書いてある通りかなり波瀾万丈な人生を送っているので、普通ではないかも知れません。でも、私は自分は特別

だとも思っていません。人は生まれてきた以上、どんな境遇で、どんな人生を送ろうと、みんな一人ひとりかけがえのない命・人生だと思うので、みんな同じ、みんな一緒だと思っています。

私は若い時から「自分の人生、どう生きていけばいいのか」「真実ってあるのだろうか。あるのだったら、それはどういうことだろう」と、自分なりに考えながら生きてきました。人並みに結婚し子供ができても、その命題はずっと私の中にありました。

今から三十年前にある方に出会い、「真実はこうですよ」とはっきり教えていただきました。そして「真実は頭ではわかりません。心でしかわかりません」と言われ、「心を見る学び」を始めました。しかし、何をやるのものんびり屋の私は、心の底では「そうかも知れない。きっとそうなんだろうなあ」と思いながらも、この学びはそれまで共感してきた読んだり見たり聞いたりした人生訓とはかけ離れていたし、時間的に仕事や子育てで忙しいし、趣味のダンスも続けたいし、あまり熱

心にはやってきませんでした。でもなぜか「ここにこそ真実がある」という思いが強くあって、細々とでもいい、自分のペースでずっと続けようと今まできました。丑年生まれの私、それこそ牛歩の歩みでした。それが、偶然のいきさつながらこの文章を綴ることになって、綴っているうちにはっきりと鮮明に自分の中の「真実」が明らかになりました。三十年前教えていただいた通りでした。

私は最初からこのような本を出そうとは思っていませんでした。二十一年前七十八歳で亡くなった父が書いた『私の歩んだ戦記』という手記を偶然三年ほど前に見つけました。あまりに読みにくかったので、最初だけちらっと見てほったらかしにしていましたが、それを偶然昨年暮れ地元の郷土史家の先生に読んでいただく機会があり、「感動した」という感想をいただきました。私は「えっ、そんな感動的なことが書いてあったのかな」とびっくりして、改めて読みにくいところを整理しながら、父の手記を最後まで読んでみました。父は「戦争だけは絶対再び起こしてはいけない」という思いを五十年間ずっとずっと持ち続けていて、満を持して必

私の歩んだ戦記

終戦を迎えて五十年 ，私も熟年となり余生を過ごしている今、熾烈を極めた戦争から半世紀になります、当時を振り返り思い起こし記憶を辿りながらペンをとります。

昭和十八年一月山形の部隊に入営することになり，近くの神社で武運長久祈願をして，村長はじめ部落の青年団，国防婦人会，愛国婦人会，村民の見送りをうけ滅私奉公の誓いあらたに日詰駅より勇躍出発しました。その時私は二十一才でした，当時は軍国主義一色で，只々御国の為に命を捧げるのが，男子の本懐と覚悟を決めていたのであります。

三月まで初年兵の基本教育を受け，山形駅を出発して朝鮮を経由で一週間がかりで，満州国牡丹江省綏西を根拠地にしている，歩兵第三十一連隊第一中隊（綏西第二七三部隊）に入隊したのです。

然しこれからが我々兵隊に辛酸苦難の道が待受けていた，敵はソ聯を想定しての厳びしい訓練演習が始まり，とても筆舌に表わすことのできない程のもので，関東軍の精鋭，百戦練磨，不撓不屈の精神を培い，最強の兵隊を鍛え上げる目標でもあったのです，厳寒の満州で昼夜を分かたず曠野を駆け巡り，或は銃剣術に射撃訓練に，氷点下三十度を越す原野での野営演習に，指が凍傷に侵されても満足な手当も受けることも出来ず，今もその傷痕が残っております。兵舎に在っては軍律厳しい中での初年兵は一時も気の許すことなく，班長及び古兵の兵器の手入れ，洗濯掃除に寸暇を見ては勉強をしたいと思っても，午後九時消灯となれば内務班で出来ず，薄暗い電燈のついている便所が唯一の勉強部屋であり，参考書をもって勉強をはじめるが，その内に昼の疲れで睡魔が襲って来て幾度か便所で倒れた

父が綴った手記の原本

死でこの文章を綴ったんだなあということが胸に迫ってきました。

幸い私の母は今年九十六歳になりますが、まだ健在です。母にはずっとずっとどんな時にも温かく見守られ支えられてきたという思いがあり、まだ頭がしっかりしているうちに「産んでくれてありがとう」と伝えられましたが、父にはずっと苦手意識があり、二十一年前亡くなったという一報を聞いた時もあまり悲しいという感情も出てきませんでした。しかしこのたび父が必死で綴ったであろう文章を読んで、初めて父に対して「ごめんなさい、ありがとう」という思いが湧き起こってきました。そしてせめて父への罪滅ぼしとして今私にできることは、三十年間曲がりなりにも校正の仕事をしてきたから、父の手記を読みやすいようにリライトして、私の感想文も添えて小さな冊子にして身近な人たちに、特に母がまだ生きているうちに読んでもらうことかなと思い、書き始めたのがこの文章でした。

しかし、書いているうちに始まったロシアによるウクライナ侵攻が父の戦争体

験とリンクし、どこか平和ボケしている私の心に、まるでミサイル爆弾のような大きな衝撃を与えてくれました。そしてその衝撃を受け、真剣に「心を見ること」、特に「闘い」「戦争」という思いに真剣に向き合って書いていたらこのような本が出来上がりました。世間一般の常識・価値観からすれば、「えっ」と驚くようなことも書いてありますが、もしかしてそういうこともあるかも知れないと、そこから流れる波動を感じながら読んでいただけると幸いです。

ということで、まず初めに父の手記をリライトした『私の歩んだ戦記』に目を通していただきます。

私の歩んだ戦記

熊谷　武三

終戦を迎えて五十年、熾烈（しれつ）を極めた戦争から半世紀となります。私も熟年となり余生を過ごしている今、当時を振り返り記憶を辿りながら、ペンを取ります。

昭和十八年一月、山形の部隊に入営することになり、近くの神社で武運長久を祈願し、村長をはじめ部落の青年団、国防婦人会、愛国婦人会、村民の見送りを受け、滅私奉公の誓い新たに、日詰駅より勇躍出発しました。その時、私は二十一歳。当時は軍国主義一色で、ただただ御国のために命を捧げるのが男子の本懐と、覚悟を決めていたのであります。

三月まで初年兵の基本教育を受けました。それから山形駅を出発、朝鮮を経由して一週間がかりで満州国牡丹江省綏西（ぼたんこうしょうすいせい）に到着し、ここを根拠地にしている歩兵第三十一連隊第一中隊（綏西第二百七十三部隊）に入隊しました。

それから先には我々兵隊にとって辛酸苦難の道が待ち受けていました。ソ連を敵と想定した、とても筆舌に尽くしがたいほどの厳しい訓練演習が始まりました。関東軍の精鋭、百戦錬磨、不撓不屈（ふとうふくつ）の精神を培い、最強の兵隊を鍛え上げる目標があったのです。厳寒の満州で昼夜を分かたず曠野（こうや）を駆け巡り、あるいは銃剣術や射撃訓練等々、氷点下三十度を超す原野での野営演習では指が凍傷に侵されても満足な手当ても受けられず、今もその傷痕が残っております。

兵舎にあっては軍律厳しく、初年兵は一時も気を許すことができず、班長及び古兵の兵器の手入れや洗濯・掃除をしなければなりません。寸暇を惜しんで勉強をしたいと思っても（＊武三は満州青年学校に在籍していたようです）、午後九時消灯となれば内務班では

できず、薄暗い電灯が点いている便所が唯一の勉強部屋でした。参考書を持って勉強を始めても、そのうちに昼の疲れで睡魔が襲ってきて幾度か便所で倒れたこともありました。床に入っても、激しい一日の訓練に軽く盛った一膳飯では空腹で耐え切れずあまり眠れません。そのうちうとうとしているうちに、不寝番の勤務のため叩き起こされます。一時間余り立っているのは本当に辛いものでした。なんで初年兵はこんなに辛いものかと思っても、これが軍隊における躾（しつけ）で絶対服従せねばならないものでありました。

昭和十八年八月ソ満国境警備に配属されました。そこはソ連国境から数キロの地点で、監視所から双眼鏡で見ると、ソ連兵が兵舎から出入りするのがはっきり見えます。今度は連日要塞及びソ連兵の越境攻撃に備えての陣地構築に従事。もちろん電灯はなく、夜はランプ生活で不自由な日々でした。

昭和十九年七月、突如として動員下令が発せられました。我々兵隊にはどこに転進するのか皆目わからず、只々上官の命令に従って行動せざるを得ませんでした。

支給された新品の軍服を見れば、南方方面に行くことだけはわかりました。黙々と身の回りを整理しながら、いよいよ自分の命がどこでいつ果てるのかと考えると、思わず故郷を出る時母親から授かったお守り札と千人針の胴巻きを握りしめ、祖国日本の方角に向かって跪き、頭を下げてひたすら武運長久を祈りました。

軍装を整え出発準備完了。七月二十七日綏西駅より乗車し、目的地不明のまま朝鮮の釜山に到着しました。そこから八月十二日貨物船永治丸に乗船し出港しました。今までの大陸での生活が、今度は板子一枚下が底知れぬ荒海であると思うと、狭い船中での居心地がますます心細く感じ、どこの陸地でもよい、一日も早く上陸したいと祈っていました。我々輸送船団が比島に向かっていると知らされたのは出港後のことでした。

いよいよ最悪の事態が到来しました。上官から現在台湾高雄沖を航行中であることを知らされ、「各兵はおのおの武装を整え、一朝有事の際は命令に基づき随時退船（＊海中に飛び込むこと）し得るように準備の万全を期すべし」との命令

が発せられました。いよいよ来るものが来たか、身の毛がよだつ思いがし、もう運を天に任せるほかなし、ひたすら無事を祈るばかりでした。

空は晴れ遥かに南十字星が輝き、海上には夜光虫がきらめいていて、大自然の美景にしばし陶然としながらも不気味な静けさに包まれていた九月六日未明、突如永治丸の船首に激震と同時に火災が発生しました。直感的に敵潜水艦からの魚雷攻撃と判断しました。第二弾の魚雷は中央部に命中。弾薬、爆薬燃料が大音響とともに爆発し、我々は海中に投げ出されました。私はどのようにして海に投げ出されたのか、無我夢中ではっきり覚えていません。

永治丸は爆発沈没しました。私は船体の破片につかまり浮遊していました。海面には負傷して助けを求める絶叫の叫び、力尽きて沈んでいく者、「おがああ、助けでけろう、おどう、助けでけろう」と泣き叫ぶ者、まさに生き地獄のようでした。私は「なにくそ、ここで死ぬものか」と必死に破片につかまっていましたが、次々と力尽きて沈んでいく戦友を目の当たりにして「次は俺の番か」と考えているう

ちに、ようやく駆逐艦に救助されました。とたんに気が遠くなり意識を失いました。海軍の兵隊に樫の棒で尻を叩かれ気付いた時は褌一枚で裸にされ甲板に横たわっていました。十日以上も食事をしないで下痢をしていたので、軍医の診察を受けたら赤痢と診断され、急きょ隔離されました。それから何日かかったのかわかりませんが、門司港で下船させられ、担架で小倉陸軍病院に護送されました。

久しぶりに祖国日本に帰還した安堵感が一挙に出て、極度の衰弱に加え高熱に侵され、数日自分がどうしていたのかわかりませんでした。気が付いてみたら寝台に両手両足を紐で縛りつけられていました。あとで看護婦に聞くと、暴れてしょうがなかったとのこと。誠に申し訳なかったと思うとともに、「あの世に行かずに俺は

助かった、もう大丈夫だ」という安堵感でいっぱいでした。

一日も早く元気になりわが部隊に復帰しようと思っていたところ、戦況はますます不利になり、Ｂ２９の空襲が北九州にも飛来し、病院も空爆を受けました。危うく命を失うところを衛生兵に助けられ、博多陸軍病院に転送されました。

その後仙台、弘前、山形と各陸軍病院を経て、昭和二十年一月すっかり回復し山形の部隊に配属されました。それから青森、釜石捕虜収容所、仙台の東北憲兵隊司令部と転属を重ね、遂に八月十五日の終戦を迎えました。

九月、敗戦の悲しみをかみしめつつ足取りも重く、家路に着きました。「ただ今帰ってきました」と躊躇しながら家に入ると、夕食の時間でした。母が毎朝夕食卓に陰膳を供えて息子の無事を祈っていたと聞き、無学無知な母であったが、わが子を思う慈愛の心に思わず涙が出てきて胸が熱くなりました。

ここに、戦争当時を思い起こす時、生死の境をさまよい、あらゆる苦難の道のりを乗り越え、耐えがたきを耐え、九死に一生を得て、今日まで生きて元気でお

られるのも、まさに神仏のご加護のたまものであります。戦陣に散った先輩、戦友のご冥福を祈るとともに、悲惨極まる戦争を経験した私には、二度とあのような惨めさを、今の若者には絶対に味わわせたくありません。世界の平和を祈りつつペンを置きます。

―合掌―

＊永治丸沈没で大半の将兵が海の藻屑（もくず）と消え去りましたが、我が中隊は台湾高雄で態勢を整え直し、比島ルソン島に上陸。しかし悪戦苦闘ののち悉（ことごと）く全滅の悲運に遭いました。伝統と光輝ある歩兵第三十一連隊は軍旗を河原にて奉焼し、連合軍に降伏しました。（『聯隊史』より）

＊満州を出発する時は二百八十八名だった中隊員のうち、終戦後比島より生還できたのはわずか十七名でした。

お父さん　ごめんなさい

父の『私の歩んだ戦記』という原稿を初めて目にしたのは三、四年前だったと思います。当時私はサービス付き高齢者向け住宅に入所した母が残した書類や資料を整理していました。小学校教師を退職した後、さまざまなボランティア活動をしていた母が残した文書類は膨大なものでした。不要なものは捨て、必要最低限のものだけを紐で結んでまとめるという作業を延々とやっていた時に、その中に風呂敷に包まれたこの原稿を見つけたのです。

まずワープロで印字されていたのでびっくりしました。父がワープロを使えたなんて意外だったからです。二十一年前の平成十三年二月一日、七十八歳の時突然くも膜下出血で急死した父。父が亡くなってから帰郷した私は、父の晩年のことはあまり詳しくは知らないのですが、㈱日本通運を定年退職してから、民生委員や近く

の介護福祉施設の理事、紫波郡医師会の事務などをやっていたと聞きました。達筆で書道に斃けた母は書き物に関しては会議の議事録やら挨拶文やらたくさん文章を残していましたが、父が何か文章を書いたということは聞いたことがありませんでした。きっとワープロは医師会の事務をやっていた時に覚えたのでしょう。

『私の歩んだ戦記』は一部ずつＢ５の茶封筒に入っていて、全部で十二～三部ありました。誰かに配る予定だったのか？　母に現物を見せて聞いても「わからない」と言うばかり。

さっと目を通したところ、父には悪いけれど読みにくいことこの上ない。書き慣れていないせいか、句読点がなくて改行もない、一文が長々と続き、言葉の使い方もおかしい。解読するのに時間がかかりそうなので、いつか時間がある時にゆっくり読んでみようと、風呂敷を包み直してそのまま本棚に置きっぱなしにしていました。

それが昨年末偶然、郷土史家の内城弘隆先生に見ていただく機会があり、読ん

でいただきました。お忙しいなかこんなつたない手記を読んでいただくのは申し訳なく、そのままやり過ごしていただければと思っていたところ、先生からすぐ電話があり、「感動して涙が出た」とのこと。えっ、そんなに人の心を打つようなものだったのかなと、かえって驚いてしまいました。

改めて父の文章に向き合ってみました。その時私がこれを読むのにあまり気が進まなかったのは、単に文章が読みづらいだけではなかったことに気が付きました。私は父の戦争の話が大嫌いだったのです。小さいころ父はよくお酒が入ると、「船から放り出されて九死に一生を得た」という戦時中の話を何回もしていました。小さかったから内容もよく理解できないのに、しつこくてうんざりしていました。それと三歳か四歳のころ父から殴られたり雪の中に放り出された記憶があり、父が家にいるだけで私は恐怖心でいっぱいでした。さすがに小学校に入ったころからはそういうことはなくなり、むしろ罪滅ぼしなのか、欲しいものはほとんど買ってくれたし（小学二年のころ、欲しかったダッコちゃん人形を突然父か

ら渡された時の驚きとうれしさは今でも覚えています)、じん麻疹が出た時はすぐ薬局に駆けつけてくれたりと、大事にしてもらったという思い出もあります。しかし幼児の時の恐怖心はずっと心の奥に残っており、母には無条件で温かく包まれていると感じられるのに、父はどうしても苦手でした。そんな父に対する気持ちが、父がきっと満を持して必死で綴ったであろうこの文章を読んで、一挙に氷解していくような気がします。

小さいころ私にとってうっとうしく感じていた、父の「九死に一生を得た」話は、まるで映画を見ているような壮絶な話だったことを初めて知りました。

戦況の悪化で父の所属していた部隊が満州からフィリピンへ輸送船で移動させられていた時、米軍の潜水艦から魚雷攻撃を受けて乗っていた船が沈没し、乗船していたほとんどの兵隊さんたちが亡くなったなかで、父は船の破片につかまって護衛の駆逐艦に助けられたこと、その時父は赤痢を患っていて日本に強制送還

させられたこと、さらに当時入院していた九州の小倉陸軍病院が空襲に遭ってからろうじて衛生兵に助けられたことなど、まさに「九死に一生を得た」話が二つも三つも重なっていました。そしてもし父が乗っていた船が攻撃されないで無事フィリピンルソン島へ着いていたら、後に米軍の猛攻撃を受けて日本軍は全滅状態だったことを思えば父も戦死していたかも知れません。父は正真正銘奇跡的に「九死に一生を得た」人でした。今まで事実を知らずに頭からあなたの話を毛嫌いしてきたこと、お父さん、本当にごめんなさい。

兵隊さん、とりわけ初年兵（父はよく一番下っ端の二等兵と言っていました）の厳しい軍隊生活は、映画やテレビ、本などで見聞きし知っているつもりでした。でも実際父が書いているものを読むと、もっと鬼気迫るものがありました。氷点下三十度って想像もつかないですが、そんなところで野営演習をしていたなんて…どんなに辛く過酷だったことか。

また上官の命令には絶対服従しなければならず、父はたぶん上官から殴られた

りしたこともあったのではないかと思われます。だから子供を殴るということにもあまり罪意識を感じていなかったのではないでしょうか。終戦後十年位は学校でも兵隊上がりの先生が、躾と称して生徒を殴ったり叩いたりしていたことを思えば、当時の風潮として体罰も当たり前のように許されていたのでしょう。私は父は軍隊で殴られていたから、その腹いせに自分の子供を殴ったのではないかとずっと父を憎んでいました。父の本当の気持ちはわかりませんが、父のその後の態度を見ると、反省していたことは確かです。きっと軍隊時代の過酷な体験から来るさまざまな感情が、自分の家族を持ってからでも影を落としていたのでしょう。父が悪いわけではない。父は真面目にその時代を生きてきただけだったと思えば、すべてを許せるような気がします。

　しかし純粋無垢な幼児にとって、訳もわからず殴られるというのは本当に恐怖以外にありません。今は法律でも守られているので、親から殴られるということはあまりないでしょうが、時々親の虐待によって小さな子供が命を亡くすという

事件を耳にするたびに、あの子はどんな恐怖の中で命を落としていったのかと思うと、本当にいたたまれない気持ちになります。

恐怖の中で命を落としていったのは、戦死していった人たちも同じではないでしょうか。父の手記の中で、「おがあ、助けでけろう、おどう、助けでけろう」と泣き叫びながら海に沈んでいった人たち、どんなに怖かったでしょう。御国のため死は覚悟のうえ出征したとはいえ、いざその時が来ると、出てくる言葉は「天皇陛下、万歳」ではなく、「おかあさ〜ん」だったということを聞きました。

人は誰でも戦うために、ましてや殺したり殺されたりするために生まれてくるのではない、お母さんも必死の思いで産んだ子が戦死することなんか望んでいないはずです。祖母が毎日朝夕陰膳（かげぜん）を供えて息子の無事を祈っていたというくだりを読んだ時、祖母と父の本当の思いを知り、私も一緒に泣きました。共働きだった私の家では、昼は私は母方の祖母に預けられたので、母方の祖母には育ててもらったという親しみが湧いてくるのに比べて、父方の祖母はどこか近寄りがたい

ところがあり、少し苦手意識がありました。でも子を思う気持ちはみんな一緒だったんだとわかり、祖母にも申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。特に祖母は次男（父のすぐ上のお兄さん）を南方の戦場で亡くしているので、よけいに三男の父には帰ってきてほしいと願っていたのではないでしょうか。

戦争は本当に悲惨です。父は最後に、「自分が体験した惨めさを若い人たちには絶対味わわせたくない、世界の平和を祈っている」と締めくくっていますが、終戦から八十年近く経った今でも、世界のどこかで戦争は続いています。

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻勃発

二〇二二年二月二十四日、ロシアの独裁者プーチン大統領が隣国ウクライナに軍事侵攻し、新たな戦争が始まりました。情報が瞬時に世界中に流れる現在では、

連日戦況が逐一テレビやインターネットで流れます。爆撃で建物が破壊されていく様子が流れ、地下のシェルターに身を寄せて避難している人たち、最小限の荷物を持って何日もかけて隣国のポーランドやハンガリーに避難していく親子連れやお年寄りたち、皆さん泣きながら「もうやめてほしい」と訴えている。つい最近まではミャンマーの軍事クーデター、アフガニスタンのタリバン政権の支配、シリアの内戦等々で銃撃戦の模様や難民の苦しい生活ぶりなどの映像が流れていた。八十年前の第二次世界大戦中に戦場になっていたところで起こっていたことと全く同じことが起こっている。なぜまだこんな悲惨なことが続くのかと悲しくなります。もし、今核兵器が使用されたら第二次世界大戦の比ではない、一瞬にして多数の人々が死に、広大な土地が破壊されるでしょう。ロシアのウクライナ軍事侵攻に対しては、国連はじめ世界中から非難と反対の声が上がり、西側諸国からさまざまな経済制裁が行われ、ロシア国内でも力で制圧されても反対のデモが収まらないとのこと、プーチン大統領はだんだん孤立していくでしょう。

そもそも平和を望むのなら戦車や軍艦、戦闘機などの軍備は不用だと思うのですが、奇しくも先日、自衛隊小松基地に所属するF戦闘機が、離陸後数分で石川県沖の海上に墜落するという事故がありました。日本の自衛隊にも戦闘機が配備されていて、軍事訓練が行われていたんですね。戦闘機一機造るのに何十億というお金がかかっているとしたら、そのお金で今コロナ禍で苦しんでいる人たちをみんな救うことができるのに、と正直思います。また北朝鮮では愚かな独裁者が、国民の貧困をよそに莫大な費用をかけて弾道ミサイルを造り、威嚇のために頻繁に発射しています。本当に狂っているとしか思えません。

巨大な軍事力を見せつけて、その軍事力で戦争を起こして国民が幸せになるなんて誰も思っていないはずなのに、なぜ戦争はなくならないのか。自分さえよければという人間のエゴと欲がある限り、戦争はなくならないのでしょうか。限りある食糧や燃料を奪い合うのではなく、お互いに分かち合うことができたら戦争なんか起きないのに…と単純に思います。こんなこと子供だってわかるのに。難

しい言葉で大義名分を並べて戦うことを正当化する権力者なんかいらない、みんな仲良くしようよと、質素に暮らし、誰にもへつらうことなく、差別区別をしないでみんなを平等に愛せる人が国のリーダーだったら、戦争なんか起きないよなと、夢みたいなことを考えています。

一方で、神や仏に平和を願い祈っていたら、戦争はなくなるのでしょうか。神社仏閣を訪れて当たり前のように拝み祈り、それを美徳と考えている人々がほとんどを占めるこの日本で、こんなことを言うのは異端者として世が世だったら迫害されるか死罪になるかも知れませんが、あえて言います。むしろ戦争に加担しているのは、それぞれの国で勝手につくった宗教なのではないでしょうか。太平洋戦争だって、神国日本を信じていた人たちが起こし拡大していき、そして大半の国民も、日本の神が自分たちを守ってくれると信じていたから、「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍んで」きたのでは？　その結果、神は日本の国を守ってくれましたか。父は「今日まで生きて元気でおられるのも、まさに神仏のご加護

のたまもの」と書いていますが、では戦死していった人たちには神や仏はいなかったのでしょうか。神や仏はそんなに不公平なものなのでしょうか。かつてイラクで戦争が起こった時、当時のフセイン大統領は、ジハード＝聖戦と称して国民の結束を呼び掛けていましたね。人間が殺し合う戦争に〝聖なる〟なんてあり得ないのに。戦争は悪でしかないのに。宗教は時として、戦争を起こし拡大しようとするその時代の権力者に利用されてきたのではないでしょうか。プーチン大統領にも、後ろ盾としてロシア正教のキリル総主教という人がいるとか。ここでも宗教と戦争が結びついていたんですね。

では、一時宗教を否定して国を築いてきた共産主義国は戦争を起こしていないのかと言えば、自国の繁栄と安定のためにはなりふり構わず、他国と対立したり財力や軍事力で弱小国を支配しようとしています。結局宗教や何とか主義という思想信条には関係なく、人間の欲とエゴが渦巻くところには必ず闘いが起こり、戦争が起こるのではないでしょうか。

それは国同士だけでなく、個人と個人の間でも、企業間でも、地域のコミュニティーの間でも同じことが言えます。一九四九年生まれの私は幸い戦争直後の混乱期も知らず、日本の高度経済成長とともに青春時代を過ごし、バブル経済の恩恵もあずかりました。それは父母の世代の人たちが、敗戦の反省の上に築いてくれた平和で繁栄にあふれた社会だったのかも知れません。その意味では父母の世代の方々には本当に感謝しています。しかし一見平和で繁栄にあふれた私たちの世代にも、実際兵器を持たなくても常に競争があり、闘いがありました。受験戦争、企業戦争、企業や組織の中では出世競争等々。心は常に他人と比較し優越感と劣等感を行き来し、不安と恐怖の中にありました。もちろんそんな不安と恐怖を紛らわしてくれる文化・芸術・娯楽もたくさんあり、海外旅行も行きたいところに行けました。しかしそういう楽しみも一時的なもので、すぐまた元の木阿弥に戻ります。結局どんな世の中にあっても、闘いの不安と恐怖は、根源的にずっとずっと人間の心の奥底に潜んでいるような気がします。

「心を見る学び」に出会う

バブル経済が崩壊し始めた一九九二年、私はある心の学びに出会いました。それは宗教でもなく、哲学や心理学といった学問でもなく、またその当時流行(はや)っていた精神世界の類のものでもなく、ひたすら「あなたの心を見ていって下さい」という学びでした。きっかけはつまらないことでそれまで仲の良かった夫の妹と大喧嘩をしたことです。それまで私は心の中では気に入らないことがあったとしても、面と向かって人と喧嘩をしたことがなかったので、自分の中から思わず出てくる相手を非難する言葉にびっくりしました。私の中の闘いのエネルギーの噴出でした。今までいい人ぶっていたけれど、私の中には誰かを敵とみなしたら徹底的に闘うエネルギーがあると自覚したのです。そんな時、夫の妹と私の共通の友人から誘われたのが「心を見る学び」でした。

その学びは、大阪の府立高校の元校長先生だった田池留吉という人が、「私たち人間の本当の姿は肉（目や耳など五官を通して感じる形の世界）ではなく、意識（目には見えない、耳にも聞こえない、形もないけれど心で感じられる世界）であって、永遠に存在するものです」「人生は苦ではなく喜びです。生も死もただありがとう、幸せ、喜びです」「私たちの本質は愛です。愛のエネルギー、パワーが私たちなんです」という真実を皆さんに知って感じてほしいと、全国各地や時にはアメリカや韓国など海外でもセミナーを開いたり、本を出版したり、二〇〇〇年ごろからはホームページを駆使して進めている学びでした。かと言って田池留吉氏が指導者とか教祖で上から物申すのではなく、「あなたと私は同じです。形の世界は一人ひとり違うけれど、意識の世界はひとつです」と提唱され、「来る者は拒まず、去る者は追わず」の方針で、誰でもどんな人でもセミナーに参加できました。セミナーは多い時で八〇〇人近く参加していたので、それだけの人数を収容できるのは一流の大きなホテルしかありませんでした。その宿泊代と会

場費、交通費だけは個人で負担していましたが、セミナーそのものは無料でした。それは「本物はただ、お金を取るのは偽物」という田池留吉氏の確固たる信念があったからです。

私は青春時代から、「いかに生きるべきか」「本当の幸せって何だろう」「真実ってあるんだろうか」という命題をいつも心に抱えており、結婚してからも、かわいい一人娘が生まれてからも、ずっと考えていました。若い時は教会で神父さんのお話を聞いたり、お寺の座禅などにも参加したことがありましたが、何かちんぷんかんぷんで、宗教は自分には合わないと思いました。

田池留吉氏のおっしゃることも一見頭で考えると荒唐無稽で、「なに、これ」という感じでしたが、なぜか私の心にストレートに突き刺さるものがあり、ここにこそ真実があると直感的に思いました。それは「〝お母さんの温もり〟がわからない人にはこの学びはわかりません。まずお母さんの反省から始めて下さい」と言われたからです。最初に「お母さんに心を向けて下さい」と促された時、幼い

ころ自転車で仕事に向かう母を、「母さん、母さん」と裸足で泣きながら追っかけた光景が思い出されて、思わず「おかあさ〜ん」と声が出て子供のように泣いていました。また母が仕事から帰ってきて真っ先に飛びついてだっこされると、本当に安心でした。だっこされているだけで幸せでした。それは自分の娘が生まれてだっこした時に感じた幸せと同じでした。自分が産んだ子なのに、だっこしているとお母さんの温もりに包まれていると感じました。〝お母さんの温もり〟こそ、真実がわかる原点だと直感的に思いました。

しかし、この学びがようやくこういうことかと本当にわかるまでに、三十年かかりました。いや「わかったと思うと落ちる」とよく言われていたので、まだまだ本当にわかってはいないかも知れませんが、田池留吉氏が最初に言われた「私たちの本当の姿は肉ではなく意識で、永遠に存在するものです」「人生は苦ではなく喜びです。すべて良し、この世にマイナスはありません、すべてプラスです」ということが実感として自分の中に浸透してきて、「何がなくても幸せ」と思え

るようになりました。

私が「心を見る学び」に出会ってからこの三十年間で、阪神淡路大震災に始まってオウム真理教の事件、二〇〇一年のアメリカ同時多発テロ事件、ＪＲ福知山線脱線事故など、「えっ、まさか」「何で？」と思うような天変地異ともいえる未曾有の自然災害や事件が続きました。そして極め付きは二〇一一年の東日本大震災です。また、なぜこの人がこんなことを？と不思議に思えるほど、一見普通に見える人たちによる無差別大量殺人など、人間の心の闇を彷彿（ほうふつ）とさせるような事件も頻繁に起こりました。そしてこの二年間は、世界中が新型コロナウイルスの猛威に苦しめられています。地球温暖化による自然災害は、これからも世界のあちこちで後を絶たないでしょう。

「私の天変地異」すべてありがとうでした

私個人にも天変地異がいくつかありました。バブル経済の最盛期には、東京でフリーのコピーライターをしていた夫の年収が一千万円を超えたこともありましたが、一九九〇年代初めごろから陰りが見え始め、数年ほどで全く収入がなくなりました。お互いに経済的に自立した生活を目指していた私たちは、結婚後も私が働いていたため何年間かは持ちこたえていましたが、このままだと共倒れになると思い、私は東京に夫を残し、中三の娘を連れて、父が亡くなった後一人暮らしになった岩手の母の元に帰ってきました。

転勤とかではなく、親の趣向で保育園も幼稚園も小学校も二つずつ通っている娘は、どこに行ってもすぐ友達ができてその地になじんでいましたが、岩手でも友達や先生に恵まれて、好きなピアノのレッスンも続けることができました。東

京から岩手に転居する時、大学は東京に戻ると約束していたので、日大芸術学部ピアノ専攻科に合格した時は本当にうれしかったです。ところが東京で青春を謳歌していると思っていた娘が大学三年の秋、「今までみんなに愛され愛し、本当に幸せでした。でもやっぱり苦しい」という遺書を残し、突然自ら命を絶ちました。私にとってまさしく青天の霹靂（へきれき）のできごとでしたが、あれから十五年近く経った今では、悲しさや寂しさよりも、あんなに優しくてかわいくてしかもいつも美しいピアノを奏でてくれた子が、私の子として生まれてきてくれたことに感謝する気持ちのほうがあふれてくるから不思議です。赤ちゃんのあなたをだっこしている時、私はあなたにお母さんの温もりを感じていましたが、それは今でも同じです。私はいつもあなたの優しさと温もりに包まれていることが感じられて本当に幸せです。亜由美ちゃん、生まれてきてくれてありがとう。二十一年間生きてくれてありがとう。意識の世界では、あなたは私のお母さんでした。

東京に残り、何とか経済的に自立してほしいと願っていた夫は、東南アジア

で働いたりいい時もありました。しかしＪＩＣＡの海外シニアボランティアなどせっかくいい職場を得ながらも、あまりにも己れが偉い夫は、自分の思い通りにいかないとすぐ腹を立て、最後まで仕事を全うできずに途中でやめてしまうということを繰り返し、なんとか私も仕送りをして支援をしてきましたが、もう送るお金がなくなった二年前、正式に離婚しました。結婚生活を最後まで全うすることはできませんでしたが、私は夫と結婚してよかったと思っています。お互いフリーで仕事をしていたから、私たちは毎年年末年始二～三週間の休みを取って、スリランカや東南アジアを旅しました。小さなゲストハウスを泊まり歩いて、普通のパッケージ旅行では行けないようなところにもよく行きました。娘が生まれてからも小学校に入る前までは毎年同じような旅をしてきました。そんな経験も、この夫と結婚したからできたことと思えば感謝の気持ちが湧いてきます。何よりも亜由美ちゃんが生まれてきてくれて、私たちは本当に幸せでした。そしてあなたと結婚しなければ、私は永遠の真実を伝えてくれた田池留吉に出会えなかった。

あなたは私を真実の道へといざなってくれました。すべて良しでした。ありがとう、昌之さん。

現在私は世帯主のいない母の家で一人暮らしをしています。築五十年の家はあちこち傷んでいていつまで持つかなあという状態ですが、一人暮らしには十分なくらい必要なものは揃っているし、五十年間家族の愛憎劇を黙って見守ってくれたこの家、「長い間ご苦労様でした。本当にありがとう」と感謝の気持ちを込めながら、家も私もあと何年生きられるかわからないけれど、残り少ない日々を一緒に喜んで過ごしていきたいなと思っています。幸い私は今のところ大好きなヒップホップダンスを踊れるくらい体も健康で、何よりも私にとって一番大切な「心の学び」も、今はコロナの影響で何百人の人たちが一堂に会するセミナーという形はなくなったけれど、全国・世界の仲間たちと定期的にリモートでつながって勉強ができているし、本当にありがたいです。むしろお金と時間をかけてどこかの会場に集まるより時間的経済的に余裕が生まれて、最終的に自己確立、独立独

歩が目標のこの学びを進めていくには好都合で、自分自身の学びも進化しているように思われます。これもコロナのおかげだなと思うと、本当に「すべて良し」でした。

岩手に帰ってきて二十一年になります。昔は閉塞感を感じて早くここを出たいと思っていたけれど、故郷は自然も人も「おかえり」と温かく迎えてくれました。故郷は昔も今もあるがままだったのに、勝手に憎んだり嫌ったりしていた私。憎しみも愛もすべて私の心の中のできごとでした。三十年間さまざまな現象とともに心を見ながら歩んできた結果、ようやく「私は愛です。あなたも愛です。私たちはひとつです」という真実に辿り着くことができました。

そして今父の『私の歩んだ戦記』に向き合うことによって、私は父の本当の思いを知り、思いがけず自分の人生を顧みることもできました。私は現在七十二歳。奇しくも父がこの『私の歩んだ戦記』を記したのも七十二歳のころだったと思わ

れます。父の歩んだ七十二年間と私の歩んだ七十二年間は、社会状況からして雲泥の差かも知れません。戦争を体験したかしていないかが決定的な違いです。平和な時代を生きられた私の七十二年間は本当に幸せで恵まれていました。これもあなたが「九死に一生を得て」命を繋いでくれたおかげです。ありがとう、お父さん。

それからもうひとつ、父が命を繋いでくれたおかげで、私は田池留吉氏に出会い、ずっとずっと求めてきた真実を知ることができました。過去から未来へと永遠に続く意識の流れを知ることができました。そしてそのために私は今世生まれてきたのだと確信できました。お父さん、本当にありがとう。

プーチンさんへ

父の手記のリライトを始めたのは一月の末ごろでした。その感想文も含めて、せいぜい二、三週間で書き上げられるかなと軽く考えていました。ところがなかなか筆が進まず、書いても何だかすっきりせず消してしまうということを繰り返していました。二月四日冬季北京オリンピックが始まると、ますます気が散って集中できず、そして二十日オリンピックが終わったと思ったら、二十四日、それまでウクライナとの国境近くに着々と装甲車の隊列を集結していたロシアが、遂に国境を越えて軍事侵攻を始めました。まさに父が戦記に書いた八十年前の出来事の再現です。

爆撃で建物が破壊され、着の身着のまま逃げ惑う人たち、亡くなった人たちは黒いビニール袋に入れられて地面に掘られた穴の中にポンポン放り投げられて

いく。ロシア軍は軍事施設だけ攻撃していると発表しているが、病院や学校、民間の高層アパートなども爆撃されている。夫や息子をウクライナに残して子供連れや年配の女性たちがどんどん国外に避難している。身に着けている物や生活用品など八十年前とはもちろん機能的に便利になっているとはいえ、戦争で人が死に、家を爆撃され、怪我をして苦しんでいるという状況は、今も昔も変わらない。「二十一世紀にこんなことが起こるなんて」と、必死の思いで避難していく高齢の女性が泣きながら訴えていた。

プーチン大統領は、なぜヒトラーの再来を思わせるようなこんな暴挙に出たのか？　テレビの報道では専門家と言われる人たちがいろいろ解説しているが、どんなに自分を正当化しても、戦争を起こすこと自体が間違っているし、許されない。私は私なりに〝お母さんの温もり〟に心を合わせながら、プーチンの意識に心を向けてみました。

ああ、プーチン、『あなたは私、私はあなた』なんですよ。あなたが相手を殺すたびに、あなたも銃殺されているんですよ。あなたは自分で自分を殺しているんですよ。あなたはこれまでもたくさんの人々を殺してきました。そして何回も殺されてきました。私にはあなたの悲鳴が聞こえてきます。「おかあさ～ん、助けてくれ」と泣き叫ぶあなたの慟哭(どうこく)が聞こえてきます。

ああ、プーチン、もうやめましょう。私たちはこの地球上に肉を持ってきてから、戦いと殺戮(さつりく)を繰り返してきました。そういう転生を繰り返してきました。もうそういう転生も終わりです。今世は転換期です。今世は今までと違うんです。もうこの地球は、自分たちの役割を終えていきます。私たちは新しい次元を迎えます。もう殺戮を繰り返すことはやめていきましょう。

プーチン、さあ、目を覚まして下さい。私はあなたのお母さんです。あなたがどんなに傷ついても、どんなに狂っても、私はあなたのお母さんです。私はあなたを優しく抱きしめます。「おかえり、愛しい我が子」と、あなたをやさしく抱き

しめます。

おかえり、プーチン。愛しい我が子。いつまでもあなたを待っています。

プーチン大統領に何が起こっているのか。何か狂気さえ感じる。あなたは一体何が欲しいのですか。富と権力をすでに手にしているのに、これ以上何を欲しているのですか。無抵抗の罪のない人たちを殺してまで、あなたは一体何を求めているのですか。

プーチン、あなたを産んでくれたお母さんを思い出して下さい。あなたのお母さんはどんな人かは知りませんが、あなたが生まれた時、お母さんはうれしくてかわいくてあなたを抱きしめていました。あなたも生まれてきたことがうれしくて、ただまっすぐにお母さんの目を見ていました。あの時の喜びを思い出して下さい。お母さんの愛に全託していた、お母さんの温もりに包まれて幸せだったころを思い

出して下さい。

その後どのような経過を経て、今のような冷酷無比な人間になったのかはわかりませんが、あなたがお母さんの愛に包まれて生まれてきたことだけは厳然とした事実です。また、あなたはどんな死に方をするのかはわかりませんが、あなたの肉がなくなっても、あなたの意識はこれから何万年、何億年と、暗黒の宇宙をさまようことになるでしょう。それでも、母の意識はあなたが本来の故郷、愛へ帰ってくることを待っています。何万年、何億年かかっても喜んで待っています。あなたはお母さんの温もりを知っているからです。あなたは愛だからです。本来のあなたには愛しかないからです。

プーチン大統領のウクライナ侵攻の口実を見ていくと、ロシア系住民の多いウクライナ東部で、ウクライナ政府によるジェノサイド（大量虐殺）が起こっているから、虐げられている住民を救うための正義の軍事作戦なのだと、公然と作

り話をでっち上げ、嘘がばれないように国内の情報を統制して自分たちのプロパガンダしか国民に見せないようにするという、九十年前自分たちの偽装工作を中国軍の仕業だとして中国への侵略戦争を始めた日本軍と同じようなことをしている。戦争を起こす口実が嘘から始まっている点が、ラジオと新聞しか情報手段がなかった九十年前と、メディアが発達して世界中に一瞬にして情報が伝わる現在とで同じだということが不思議な気がします。どんなに科学が進歩して生活が便利になっても、戦争を起こそうとする人間の支配欲やエゴは全く変わりがないということなんですね。プーチンはロシア国民に嘘をつき通せると本気で思っているのだろうか。焦ってウクライナのゼレンスキー大統領やウクライナ兵、自国の戦争反対者などを口汚くののしるプーチンの姿は哀れな〝裸の王様〟にしか見えない。かわいそうなプア・プーチン!!

三月二十五日現在、プーチンによるウクライナ侵略が始まって一か月になりま

すが、まだ戦争は続いています。映画やテレビドラマではなく、現実の出来事として戦場の悲惨な場面がリアルタイムで、テレビやインターネットの映像に流れてきます。一体何が起こっているのか。正直私は父の体験した戦争も遠い昔の出来事としてとらえ、二度とこんなことは起きないだろうと高をくくっていました。また、シリアやミャンマー、アフガニスタンで起こっていることも、ある地域の特定の紛争と、どこか他人事のように思っていました。ところが、「世界の平和の番人」でなければならない国連安保理の常任理事国であるロシア自らが侵略戦争を始めてしまったことを目の当たりにして、戦争はある日突然目の前に起こり得ることなんだと、改めて衝撃を受けました。軍事大国で核兵器や生物・化学兵器も保有している国が戦争を起こしたら、まかり間違えば第三次世界大戦になりかねない。現在ＮＡＴＯ加盟国やＧ７など西側諸国は世界大戦にならないように、ロシアに対する経済制裁を強化したりウクライナに兵器を供与したりいろいろ対策を協議しているが、その間にもロシア軍は局地的にミサイル攻撃や空爆を続け

ており、一般市民の死者は増え続けています。今テレビの画面に映っている人たちの命がどんどん脅かされ殺されるかも知れないのに、ただ黙って見ているしかないなんて、自分たちの無力さを思い知らされます。それは十一年前東日本大震災が起こった時、津波に流されていく人たちをただ茫然と見ているしかなかった時と似ているかも知れない。しかし自然災害と、人間が意図的に同じ人間を殺していくのとでは次元が違います。人間はこんなにも残酷になれるんだと、今さらながら唖然(あぜん)としてしまいます。

プーチンの命令のままにウクライナの人々を殺害していくロシア軍の人たち、あなた方は死をどう思っているのですか。生をどう思っているのですか。あなた方はなぜ生まれてきたのですか。あなた方は殺人者になるために生まれてきたのですか。

ああ、本当は苦しいんです。助けてくれ～、助けてくれ～と心は泣き叫んでいます。私は人を殺したくなんかない。自分たちと兄弟のような、親戚のような隣国の人たちを無差別に殺したくなんかない。でも、命令に従わなければ自分たちが殺されてしまうんです。だから殺される前に殺すしかない。

本当は怖いんです。殺すことも殺されることも怖いんです。助けて下さい、お母さん。小さいころ怖かった時は「おかあさ～ん、おかあさ～ん」とあなたの胸に飛び込んでだっこされると、もうそれだけで恐怖も何もかも消えていった。私はあのころに戻りたい。ただ、だっこされているだけで幸せだったあのころに戻りたい。敵も味方もなかった、ただ無邪気に遊んでいたあのころに戻りたい。

もうあのころには戻れないことを知っています。たとえいつかこの戦争が終わったとしても、たくさんの人たちを殺した私の心はもう元には戻れないことを知っています。私は殺人者になってしまった。軍隊に入った以上戦場に行くことも承知していた。でも心のどこかでこの侵攻がただの軍事訓練で終わることを願っていた。実戦

にまでいかないことを願っていた。しかしプーチンのゴーサインで、とうとう私はウクライナの罪のない人たちを殺害することになった。苦しい！　苦しい！　私はもう狂いそうです。助けて下さい、お母さん。助けて！　おかあさ~ん。

私にはこの戦争の被害者であるウクライナの人々の苦しみと同時に、実際に前線で戦っているロシア兵の苦しみも聞こえてきます。それは八十年前、太平洋戦争で一兵卒として召集された父の思いとも重なります。戦争には勝者も敗者もない。どちらも苦しみと悲しみと不安と恐怖の中にいます。闘うこと自体が間違っているんです。

今度のウクライナ侵攻は確かにプーチンが始めたことであり、プーチンはこれからヒトラーのように歴史上に極悪人として名を残すでしょう。しかしだからといって、何らかの形でこの戦争が終わったとしても、世界が平和になるわけではありません。今はプーチンという一人の戦争犯罪者を敵に回して西側諸国が一致

団結しているように見えますが、戦後処理が始まるとまた新たな闘いが始まるでしょう。ただでさえ現在コロナ禍で世界中が経済危機に陥っているのに、ロシアのウクライナ侵攻によってさらに食糧危機や燃料危機が増大されている。

今は「ウクライナの人々のために」と、世界中で募金を募って戦争反対とデモも行っているけれど、いざ廃墟と化したウクライナの都市の復興が始まったら、どの国も十分に経済援助ができるだけの余裕があるのでしょうか。また、現在四五〇万人を超える人々が隣国ポーランドなどに国外避難しているけれど、受け入れ国はその人たちの生活をずっと支え続けられるのでしょうか。

これまで東南アジアや中東からの難民をなかなか受け入れてこなかった日本でさえ、まるで流行に乗り遅れまいとするかのように、ただちにウクライナからの避難民は受け入れ、生活も保障してあげるという。今まで何回も難民申請をして認められなかった人たちは、今どう思っているだろう。ここにも人種差別や時の為政者のご都合主義がうかがわれる。このままウクライナの人々の避難生活が長

引いて自国民の生活を圧迫するようになれば、他国の人々を救う前に自分の国の困っている人々を救ってくれと、今現実に経済的に困っている人たちは声を上げるだろう。民主主義とか自由主義とか世界の平和とか大義名分はいろいろ言えるけれど、本音は国にとっても個人にとっても何よりも大事なのはお金なんですよね。お金をめぐっての闘いは、武器を持っていても持たなくてもこれからも永遠に続くのでしょう。

確かにお金は大事です。生活するのにお金は必要です。でも私たちは欲にまかせて、必要以上のお金を求めているのではないでしょうか。私も人生の大半は、「もっともっと」とお金も食べ物も着る物も、必要以上に求めてきました。その結果、大量の食糧や衣類を結局消費しきれずに捨ててしまっていた。

経済が回らないと国は豊かにならないと、企業はこれでもか、これでもかと莫大な広告費を使って次から次へと新しい商品を生み出しては、消費者の欲とプライドを刺激して売り込もうとしている。その結果まだ使えるのに古いものは捨

てられ、大量のゴミ・廃棄物の山が出現する。現在、世界的に地球温暖化対策やSDGsの運動も少しずつ実行されてはいるが、果たして間に合うのだろうか。未来の子供たちのために限られた資源を残そうと、キャッチフレーズはかっこいいけれど、果たしてそれが実現できるのだろうか。

私には、人間の限りない欲望のため破壊し尽くされていく地球の悲鳴が聞こえてきます。最近頻繁に続く地震は、地球の悲鳴のようにも聞こえます。

ウクライナ侵攻が始まって三週間経った三月十六日の夜中にも、福島県沖を震源とする震度六強の地震がありました。福島市在住の友人が、「家が上下にシャッフルするようだった」と表現していましたが、東日本大震災の再来かと思わせるほどの大きな地震でした。走行中の東北新幹線の車両が脱線するほどでした。いよいよ天変地異の足音が身近に迫ってきているんだなあと、私は実感しました。

意識の転回

実は「心の学び」に触れた人たちは四十年前から現在の世界の状況、地球の様子を知らされていました。人間の欲とエゴと真実を知らない無知からくるすさまじいブラックのエネルギーがこの地球を、いえこの地球を含む宇宙まで汚し続けていることを教えてもらいました。そして人類が真実に目覚め、本当の愛と平和、幸せを得るためには、「人間の本当の姿は肉ではなく意識であって、永遠に存在するものだという意識の転回」と想像を絶する宇宙的規模の天変地異しかないことをはっきり言われていました。

私もこの学びには真実があると直感では感じていても、天変地異にはやはり恐怖があり、できればそうなってほしくないという抵抗感がありました。しかしすでに記したように、三十年前この学びに触れたころより、私たち夫婦の暮らしが

少しずつ崩れていきました。それまでは自分たちなりに努力をして、それなりに理想とする生活を築いてきたと思っていたけれど、「間違っているものは崩壊します」という田池留吉氏の言葉通り、徐々に今までの生活が維持できなくなり、最終的には私たちにとってかすがいだった娘までいなくなりました。世間的には不幸の連続に見えるかも知れません。しかし心を見ていくと、それらは決してマイナスではなく、お金や肉的な幸せに執着する自分たちの欲が見えてきて、「ああ、間違っていたな」と一つ一つ納得できるのです。それは重い重いヴェールを一枚ずつはがしていくように、いろいろな暗くて苦しい肉のしがらみから自分の心を解放していく過程でした。ひとつ気が付くと、ひとつ心が軽くなります。ひとつ心が軽くなると、ひとつ喜びが生まれてきます。そして意識の転回が進んでいきます。なかなか一朝一夕にはできませんが、それでも三十年間あきらめずにここまで来ました。

田池留吉氏は「意識の転回」をコペルニクス的転回と表現しました。十六世

紀コペルニクスが、世間でそれまで信じられてきた「地球の周りを太陽が回っている」という天動説をくつがえして、「そうではなく、本当は太陽の周りを地球が回っている」という地動説を唱えたことに匹敵するくらい、「意識の転回」は今まで信じられてきた世の中の価値観を一八〇度変えることであり、だからこそ現代の常識では受け入れられがたく、「世が世だったら処刑されるかも知れないくらいの覚悟で、私は言ってるんですよ」と、田池留吉氏はよくおっしゃっていました。

確かにそうだと思いました。私たちは生きている限り、みんな幸せになりたい、どうすれば幸せになれるんだろうと、それぞれ自分に与えられた環境で、それなりに努力をして自分たちの生活を築いてきました。うまくいった人もいれば、うまくいかなくて失意の中にいる人もいます。しかし大きな戦争がなかったこの八十年近く、おおむね私たちは科学技術の進歩・発展の恩恵にあずかり、豊かで便利な世の中を享受できました。人類は宇宙開発にまで触手を伸ばし、宇宙を支

配することも夢見ています。それが「全部間違っているんですよ。人類の欲とエゴと真実を知らない無知で築き上げてきた、目に見える世界はまもなく宇宙的規模で起こる天変地異によって総崩壊するんですよ」と言われて、誰が信じるでしょうか？　ましてや「それが私たちにとって、本当の幸せです」と言われたら、誰でも反発したくなります。生命と財産が何よりも大事で、それを守るために法律ができ、行政も経済界も一般市民もみんな鋭意努力しているのに何をぬかすかと、もし専制主義の世の中だったら即刻処刑されていますよね。しかし四十年も前から田池留吉氏はこういうことを提唱し、セミナーは全国各地の一流ホテルで開催されてきましたが、どこからも迫害などされず、むしろどこからも温かく迎えられてきました。

田池留吉氏は二〇一五年（平成二十七年）十二月、九十歳でいったん肉を置いていかれましたが（二五〇年後にアメリカニューヨークに、アルバートという名前で再び肉を持ちます）、自分の肉がなくなっても「意識の流れ」の真実が滞り

なく流れ進化していくように、形の面でもいろいろ用意周到整えて下さっていました。だから私たちは、いち早くこの学びの証し人となって、田池留吉の波動をそのまま伝えて下さる塩川香世さん（昭和三十四年生まれの普通の女性です）を中心に学びを進めてこれました。すべてが整っていたんだなあと、改めてこの学びの正確さ・完璧さに驚嘆しています。真実だから、何があってもどんな環境でも、粛々と淡々と流れ進化していくんだなあと、はっきりと確信できました。田池留吉、本当にありがとうございます。

きちんと「意識の流れ」に向き合って書こう

この原稿を書き始めた時、私は「心を見る学び」のことはあまり詳しくは書かず、さらっと流すつもりでした。なぜならこんな話、常識では反発されるだけだ、お

おっぴらにしていたずらにトラブルを起こしたくないと、自分を守る気持ちが強かったからです。事実岩手に帰ってからの二十一年間、私の心はこの学び中心に動いていたけれど、表向きはできるだけ口に出さず、冠婚葬祭も地域の風習に従っていました。唯一娘が死んだ時だけは「お葬式もお墓も要りません」と、自分の意志を貫きました。不思議にどこからも反対の声はありませんでした。

「生も死も喜び。すべて良し」だったら、神社で安全祈願をすることも、お寺で供養してもらうことも要りません。むしろそれらの行為は他力そのものだから、「自分を救う本当の神は自分の中にいます。外にはいません」という「意識の流れ」からすると裏切り行為です。現にこの学びをしている人は敏感な人が多いので、神社やお寺の近くに行っただけで頭が痛くなったり狂いそうになる人もいます。私は霊的に鈍感なのか、神社やお寺に行っても平気です。教会でも童謡を楽しく歌っていました。私にとっては神社の方やお寺の方、教会の方、みんなお友達でみんな好きです。皆さん職業としてそこに従事しているだけで、人としての

意識の世界はみんな一緒と思えます。

この原稿も、「戦争だけは再び起こしてはいけない」という父の思いを受け止め、それを引き継いでいくことが自分の役目だとか何とか、無難に体裁を整えて終えるつもりでした。しかし、内城先生に父の手記を見ていただくことになったきっかけと、この原稿を書いている最中に起こったロシアによるウクライナ侵攻が何か結びつきがあるような気がして、そこをきちんと見ておかなくてはと思うようになりました。もう自分をごまかさず、きちんと「意識の流れ」に向き合い、今何をしなければならないか行動に移す時が来ているんだよと、本当の自分から、無難に世の中に迎合して真実から逃げようとする偽の自分への促しのようにも思えました。だから、今自分が感じている「意識の流れ」に沿ってこの原稿を締めくくらなければならないと決めました。

本家の蔵から、満州事変・日中戦争時代の新聞を発見

実は元小学校の校長先生で、紫波町の歴史に詳しく、巽聖歌など郷土出身の先人たちを顕彰し、本もたくさん出版なさっている内城先生に父の手記を見ていただくきっかけになったのは、私が父の実家の蔵で見つけた戦前の新聞でした。

昨年秋、私は何十年も誰も入らなかった本家の蔵の二階に上がってみました。何か〝お宝〟でもあったら売り飛ばして冬場の小遣い稼ぎをしようという、欲いっぱいの姑息な動機でした。昔の箪笥の中には祖父母の時代の着物や帯、私が中学生のころ仕立て屋さんであつらえてもらった服などもあって、なんだか懐かしく、親の愛情も感じられました。そして、箪笥の前のホコリだらけの段ボールを一つ一つ整理しながら進んでいって見つけたのが、昔の機織り機の上に無造作に置かれていた、茶色に変色した新聞の束でした。比較的新しい昭和五十年あたりの新

聞に包まれて、昭和八年、十二～十五年の日付の新聞が束ねてありました。〝敵軍逆襲し来り　肉弾戦を展開す〟〝敵の遺棄死体五百を越ゆ〟〝皇軍天津の敵陣爆撃〟などと、満州事変後に中国軍と日本の関東軍との衝突を報じるプロパガンダ的な記事が載っていました。一体誰が何の目的でこんな新聞を残してここに置いていたのか？　父が生きていればもう百歳になるころだから、説明してくれそうな人は近くには誰もいませんでした。

　そんな折、たまたま地域の高齢者の交流会が新築された赤石神社のホールであ

り、地元桜町の歴史について講演にいらしていた内城先生に、全く講演の内容とは関係なかったのですが、蔵で見つけた新聞のことについて相談してみました。先生は快く調べることを引き受けて下さいました。そして執筆活動などでお忙しいなか、新聞一枚一枚の内容を読んで、さらに重要な部分をコピーまで取って的確にまとめて下さいました。戦前の新聞だから漢字だらけの文語体で、漢字にはルビが振ってあるとはいえ、文字は薄れているのでとんでもなく読みづらい。そんな文章を解読し内容をまとめられるのは、さすがに戦前戦中の日本の状況をよくご存じだからこそ、古文書なども読みこなしていらっしゃる歴史研究家だからこそできるんだなあと、満州事変も日中戦争もうら覚えだった私には到底できることではなく、本当に感服しました。偶然とはいえ、内城先生にお願いできたことは幸運以外の何物でもありませんでした。内城先生、本当にありがとうございました。

そして先生がまとめた資料をわざわざ拙宅まで届けにいらした時に、「実は父

の書いたこんな文章もあるんです」とお見せしたのが、『私の歩んだ戦記』でした。

先生は父の手記を読んで下さったあと、もしどこかで発表する機会があるかも知れないから父のプロフィールと写真がほしいと言われました。そこで改めて父の関係のアルバムがあるところを調べてみたら、厚さ七センチもある菊の紋章のついた立派な装丁の『聯隊史』を始めその続編、南京軍に所属していた兵隊さんたちの『南京軍属写真集』、終戦後元兵隊さんたちが集まって定期的に開かれていた『綏西部隊の集い』のアルバムと名簿など、戦争に関する本やアルバムがきれいにまとめられてありました。父の出征時に、床の間の前で日の丸と祝と書かれた旗をバックに撮った家族写真もありました。紋付きの羽織を着た祖母を始めみんな神妙な顔をしていましたが、いつもおっかない顔をしていた祖父が息子にこころなしか寄り添うようにしているのが、何か切なさを感じました。

また父に比べたら文章を書き慣れている方が書いた、満州からの過酷な逃避行を記した冊子もありました。その方は兵隊さんではなく、ソ連と満州の国境

の街綏陽（すいよう）というところに勤務していた警察官でした。昭和二十年八月九日未明一五〇万を超えるソ連の機甲軍団が突然国境を突破して侵入してきました。その前日は綏陽軍人会館で慰問団による演芸会があり、軍人や陸軍病院の看護婦たち、一般邦人も見に来ていて、戦時中とはいえ、普段通り楽観的なムードだったとのこと（ソ連とは不可侵条約が結ばれていたから、国境付近の日本軍にもどこか楽観的なムードがあったんですね）。それが突然のソ連軍の侵攻によって、一瞬のうちに満州全体が凄絶悲惨な地獄絵図のようになったそうです。まるで今のロシア軍のウクライナ侵攻そのものです。この方は綏陽を命からがら脱出し、その後日本内地に引き揚げるまでの一年二か月の間、過酷な逃亡と放浪、遭難の綱渡りだったそうです。徒歩で逃亡中、ソ連軍の戦車に遭遇して銃撃されたり、終戦を知らされてからも中国国内で戦犯として逮捕され処刑されそうになったりと、それこそ何回も九死に一生を得てきたそうです。乗っていた船が撃沈されて早々と日本に送還された父と比べたら、何倍も過酷で悲惨な体験だったと思います。終

『聯隊史　歩三一岩手会編』

綏陽会訪中団（1998 年）

戦直後の満州には、中国人と日本人のほかに、朝鮮人や一九一七年のロシア革命を逃れて亡命してきていたロシア人もいて、それぞれの立場で争い合ったり逆に助け合ったりするというさまざまな人間模様が描かれていて、ドキュメンタリー映画を見ているようでした。また冊子の後半には、少年時代の思い出を童話風に綴った作品も何篇かあって、美しい風景とともに描かれた家族愛の物語にとても感動しました。『いまも　わが綏陽』とタイトルのついた一一三ページのささやかな冊子。非売品とありましたが、著者の温かい人柄もにじみ出ていて、私にとってずっと手元に置いておきたい大切な一冊になりました。

父は平成十年（一九九八年）、この方も含めて主に元兵隊さんを中心に、戦時中綏陽の街に滞在していた人たち総勢十五名で、ロシアのウラジオストックからバスで中国に入るというルートで、綏陽など国境の街やハルピン、長春、北京を訪れています。「綏陽会訪中団の旅」という表題のついたアルバムもあって、当時平均年齢八十歳くらいの〝老兵〟たちが、ホテルの従業員と思われるミニスカー

トの若いロシアの女性とうれしそうに写真に納まっていました。戦時中はこの国境の向こう側で緊迫した時を過ごしていたのに、五十年後まさかこんな穏やかな時間が訪れるとは？　皆さんつくづく平和のありがたさ、生きていることの幸せを思ったことでしょうね。

父たちが平和なロシア・中国の旅ができた平成十年から二十四年経った現在、発生から二年以上経っても流行が収まらない新型コロナウイルス感染症のため、今までのように自由に世界を行き来できなくなりました。そしてロシアによるウクライナ侵攻、もうロシアにも気楽に行けなくなりました。ロシアの人々とこんなに楽しそうに笑顔で写真を撮れる日が再び訪れるでしょうか。

プーチンの暴挙を止められない現実

私が何十年も誰も入ったことのなかった蔵の二階に上がってみたこと、そこで満州事変や日中戦争時代の新聞を見つけたこと、新型コロナのためにいろいろなイベントが中止になっていたのに、たまたま地域の高齢者の集いが開かれ、そこに内城先生がいらしていたこと、そして先生に新聞を見ていただいて父の手記も読んでいただいたこと、また内城先生の提案から父がまとめていた戦時中の写真や軍関係の本を目にしたこと、そしてこの原稿を書いているうちに始まったウクライナにおける戦争。今振り返ってみるに、去年の秋からの一連の流れは決して偶然ではなく、私に何かを促すための必然の流れだったように思えます。私はそれが何かを探りながら、このあとの文章を綴っていきたいと思います。

私は父の体験した戦争と二月二十四日ロシアが始めた戦争を、同時進行のよう

に見ることができました。もちろん第二次世界大戦とロシアによるウクライナ侵攻はその規模は全然違うけれど、戦争とはこういうものかと、戦場の現実を垣間見ることができました。建物が破壊され、人々が死に、自分の肉親が亡くなって泣き叫ぶ人たちがいて、そして戦火を逃れて外国へ避難していく人たちの長蛇の列、毎日テレビはむごたらしい戦争の状況を伝えてくれます。一方で、この状況を見ている世界中の誰もが、「もう、やめて！」と思っているはずなのに、ロシア軍の蛮行を止められない現実もあり、何か絶望感さえ覚えます。「国際社会と協力して」とよく日本の首相は言うけれど、国際社会とひと口に言っても、それぞれの国はそれぞれの事情があり、一枚岩で一致団結することができない。国連も国際司法裁判所もプーチンの暴挙を止めることができなかったし、まだ止められない。欧米諸国や日本などによる経済制裁もその効き目が表れるまでにはまだ時間がかかり、即刻戦争を止めることはできていない。毎日毎日犠牲者が増えていくのを、私たちは黙って見ているしかないのか？

四月二十日現在、もう戦争が始まって二か月近く経つのに、未だにロシアの爆撃は続いています。今ロシア軍はウクライナの東部を完全制圧しようと、東部の要衝マリウポリを掌握するためますます攻勢を強めています。その状況が気になって固唾を飲んでニュース番組を見ていますが、明らかにこのところテレビの報道は、ウクライナ関係のニュースの割合が小さくなりました。それより佐々木朗希投手が二十歳で完全試合を成し遂げたとか、大谷翔平がホームランを打ったとか、「すごい」「すばらしい」という口調でアナウンサーは盛り上げています。確かに佐々木朗希も大谷翔平もすごい逸材かも知れないが、今戦争で人が何人も死んでいるのに、所詮娯楽でしかないプロ野球でこんなに大騒ぎするなんて…結局自分に火の粉が降りかからなければ、人は目の前の楽しみのほうに気持ちが行ってしまうんですね。私はそれを責めるつもりはないけれど、これが自分本位の人間の本性なんだろうなあと少し悲しくなります。

もし今ウクライナでの戦争がなければ、私だって岩手県出身の大谷君や佐々木君を誇りに思うし、彼らの野球が好きで好きでたまらないひたむきで純真な姿には感動し、応援もしていました。しかし今はそんな彼らの話題も手放しでは喜べない。特に年俸が何十億とか何億とかいう金、金が飛び交う大リーグで、大谷翔平や鈴木誠也がホームランを打ったというニュースと、今食べ物も水もないところでいつ殺されるかわからない恐怖におびえているマリウポリの人々のニュースが同時に報道されることに、何かやるせなさと世の中の不条理さを覚えます。

オリンピックで活躍したスポーツ選手で、「スポーツには国境がない。スポーツで平和を取り戻そう」などと言っている人もいるが、スポーツの国際試合は世界全体が平和でなければできない。そしてこれから貧富の差がますます広がってくれば、もともとオリンピックだって貧しい国の人たちは出場できなかったのに、ロシアやベラルーシの選手は追放されているし、国際試合に出られる国も限られてくるだろう。太平洋戦争では沢村賞の起源となった沢村栄治投手など、優秀な

プロ野球選手がたくさん戦死しているとのこと。今日本が戦争に巻き込まれたらスポーツ選手もどうなるかわからない。現にウクライナのプロサッカー選手で軍隊に入隊し戦死した人もいるとのこと。祖国を守るためには有名人も一般人も関係なく、そこには国を守ろうとする一人の兵士がいるだけなんですね。

私自身の不安と恐怖の正体

ここまで書いてきて、私が青春時代からずっとずっと心の奥に抱いていた生きていることの不安と恐怖、人間の普遍的な悲しさが何であるか、はっきりと心に浮かんできました。それは太古の昔から続いている人類の不平等と差別、人間同士の闘いだということに思い至りました。

私は両親が共働きだったから経済的には恵まれ、自分が望むことはほとんど叶

えてもらいました。当時大学へ進学する人も少なかったころ、京都の私立大学へ行くことも許してもらいました。本当に私は恵まれていたと思います。しかしそんな恵まれた境遇でも、それを素直に喜べない自分がいました。いや、喜んではいけないような後ろめたさを常に抱えていました。

小学校では必ずクラスに一人か二人、今でいう知的障害の子がいました。また見るからに着ているものが貧しそうな子もいました。そんな子がからかわれたりいじめられているのを目撃しても、私は何も言えませんでした。忘れもしない小学四年生ごろだったと思いますが、五、六人の集団で学校から帰る途中、みんなの話の流れでまだワラ布団で寝ているという子に、私は何か彼女を傷つけるような言葉を発してしまいました。それまでじっと耐えていたように見えたその子が、とうとうこらえきれずに泣きだしてしまいました。その時私は彼女に「ごめんなさい」と言えたのかどうかは覚えていないのですが、その後もずっと大人になってからもあの時の場面が忘れられず、心の中で「ごめんなさい」を言い続けてき

ました。

いじめは昔からありました。今のようにすぐに情報が拡散することはなかったので大きく取り沙汰されたりすることはなかったのですが、学校でも会社でも家庭でも地域のコミュニティーでも、日常的にいじめたりいじめられたりの陰湿な闘いがありました。映画やテレビドラマはたいていその陰湿な闘いが題材になっており、私たちはそれを娯楽として楽しんできました。自分の中の闘いの思いがおもしろおかしく描かれることによって、どこかでそれをごまかし、容認していたようなところがあったんですね。

今ＮＨＫの大河ドラマは、『鎌倉殿の１３人』という源頼朝とその周囲の人物の物語を描いていますが、それは権力争いそのものです。源氏と平氏の敵同士はもちろんですが、同じ源氏同士でも権力争いがあり、御家人たちは誰が敵か味方か、いつ誰に殺されるかわからず常に戦々恐々としています。もともと大河ドラマは歴史上の人物のドラマだから常に権力闘争のドラマですよね。私は三谷幸喜

のファンだったので、確かに今回の『鎌倉殿の13人』も人物描写や話の展開もおもしろく、さすが三谷幸喜だと感心していました。しかしここでもウクライナでの戦争が始まってからは、素直に楽しめなくなりました。

今さら何を馬鹿なことを言うかと咎められそうですが、世界中の国家は太古の昔から常に権力闘争に勝った人に治められます。その人たちは権力を握るために、一体どれだけの人を殺してきたのでしょう。武力で国を制圧するということは、時の権力者は大量殺人者に他ならない。そこには道徳も慈悲もない。自分が頂点に立つためには殺人も正義になる。まさに現在のプーチンの論理そのものです。そして一般の人は権力を握った人に従順に従うしかなかったのですね。

私たちは歴史の教訓を踏まえ、民主主義や人間の自由・平等の権利を勝ち取ったはずなのに、それを享受できるのは世界の中ではほんの一部の人で、多くの人は未だに差別や区別、不平等の中で苦しんでいます。また、今回のプーチンのよ

うに、「国際の平和と安全を維持すること」を謳った国連憲章をいとも簡単に無視する独裁者が現れたり、結局私たち人類はどんなに英知を絞って考え、平等を目指して制度を整えたとしても、世界中のすべての人々が平等になってみんなが幸せになることは不可能です。

田池留吉の世界

やっぱり田池留吉氏が命がけで、心血を注いで提唱してきたことは真実だったと、ようやく私は長い時間がかかったけれど自分の中で納得できました。「私たち人間の本当の姿は肉ではなく意識であって、永遠に存在するものです」という真実。これを頭ではなく、心で納得しない限り私たちの中で闘いは永遠に続き、絶対に幸せになれない。肉を基盤に生きている限り、私たちは闘いの連鎖からは絶

対に解放されないのだと思います。そのために「意識の転回」が必要でした。

しかしこれがとてつもなく難しいものでした。だって私たちは生きていくために食べ物や着る物や住む場所が必要です。そしてそれらを得るためにお金が必要です。お金を得るためにみんな働かなければなりません。できるだけ楽にお金を得られればいいけれど、そんなことはあり得ない。いい仕事に就くためにはいい大学に行くことが今の日本では常識で、学校の成績が上がるように塾に行かされたり、お金をめぐってもう子供のころから競争社会に組み込まれてしまっている。つまり日本ではもう子供のころから闘いを強いられています。それを私たちは当たり前のこととして受け入れてきたけれど、私は何か苦しかった。夫の仕事が順調で海外旅行に行きやすいようにと成田市に家を買って住んでいた時も、成田はやっぱり東京から遠いからと東京に戻り、世田谷区成城で家賃二十七万円のマンションに住んで、子供にはバレエとピアノを習わせていた時も、私は常に不安の中にいました。ちっとも幸せではなかった。どんなに経済的に恵まれた環境にい

ても、人間は肉で生きている限り常に不安と恐怖から解き放されることはない。だから人々は太古の昔から自分たちの環境と現状に合ったそれぞれの宗教をつくり、救いを求めて祈ってきたのですね。

田池留吉氏は「肉で生きることは狂っているんです。人間はみんな狂ってきたんです。みんな地獄をさ迷ってきたんです」と表現しました。「みんな狂っている？何をぬかすか」と、まともにこの社会で生きてきた方々はお怒りになると思います。それは当たり前ですよね。私だってもしこの形ある世界しか知らなかったならば、そう思うでしょう。何か変なことを言う変わった人だなと、田池留吉氏のことを思うでしょう。しかし、田池留吉氏が指し示して下さった意識の世界、母の温もり、愛しかない世界があるんだということを知ったならば、誰でも「ああ、ここに帰りたかった。ここが自分が本当に求めてきた安らぎの場所だった」と思えるでしょう。

この世に生まれた人は誰でも、生まれた国が違えど、肌の色が違えど、お金持

ちであろうと、スラム街に生まれて一生貧しい生活を強いられた人も、プーチンのように戦争を仕掛ける人も、何も悪いことをしていないのに銃で撃たれて亡くなったウクライナの人たちも、みんなお母さんのお腹から生まれてきました。みんなお母さんの子宮を知っています。お母さんの子宮の中でお母さんの愛に全託してただただ喜びだけで存在していたことを知っています。その後生まれ落ちた環境によって、人はそれぞれの国や地域の法律、宗教、しきたり、ルールの中である程度それらに縛られながらそれぞれ悲喜こもごもの人生を歩み、そしてやがて死を迎えます。自分の一生が幸せだったか不幸だったか、その判断はそれぞれ違うと思いますが、どんな人生を送ろうと人は生まれてきた以上必ず死を迎えます。形の世界ではそれで終わりとされます。そしてそれぞれの国の宗教によって死者の魂を供養するという行事が行われます。それで本当に供養されているのかどうかわからないけれど、その地域の風習ではそういうことになっているからという程度で、ほとんどの人はその風習に従っているだけではないでしょうか。

ここで「いいえ、私たち人間は肉ではなく意識です。私たちは意識、波動の世界に永遠に生き続ける命、エネルギーです」と、過去どの文献にも記されていないことを、今世初めて意識の世界からこの地球上に肉を持った田池留吉氏によって伝えられました。まるでＳＦ小説みたいな荒唐無稽なことを言うなあと、馬鹿にされるかも知れないことを承知ではっきり言います。これは作り話でもなくＳＦ小説でもなく、正真正銘事実です。今まで人類史上誰にもわからなかった真実です。今までは誰にもわからなかったけれど、田池留吉氏によってはっきりと示されたこれからは、真実だから誰にでもわかります。素直にふっと「お母さん」のほうに心を向ければ、老若男女、裕福な人も貧しい人も、民族や国を問わず、頭のいい人もそれなりの人も誰にでもわかります。一番よくわかっているのは無心に喜びを表現している赤ちゃんです。世間では学識の高い大学教授とか有名なジャーナリストとかが何でも知っているという顔でテレビなどで解説をしていますが、どんなにたくさんの文献を読んで分析をし、いろいろな情報を集めて議論

をしても、学問では人類の平和を実現できませんでした。今度のプーチンの暴挙にも、世界中の学者も政治家もジャーナリストも国連のグテーレス事務総長でさえ右往左往するだけでした。

私自身田池留吉の世界を本当にわかっているのかどうかはわかりません。この文章だって自分でわかっている分しか書けないので、田池留吉の世界からすると、ようやくスタート地点に立っている程度かも知れません。それでもいいんです。私はここにしか真実はないということだけは自信を持って言えるので。どんなに時間がかかっても、田池留吉は一人一人の愛の覚醒をただ喜んで待ってくれていることを知っているから。そして自分の思いが間違っていれば、それが苦しみとして現れるので、私はそこで間違いを喜んで受け止めて本来の軌道に戻していくという作業を淡々とやっていくだけです。肉の世界では、間違うとマイナスだから落ち込んだり自分を責めたり誰かのせいにして恨んだりを繰り返し、ますますマイナスを膨らませていきます。意識の世界では、間違いも喜びです。だからマ

イナスはありません。みんなプラスです。すべてが愛です。すべてが喜びです。お母さんの温もりのなかにすべてひとつです。

こんな世界があることを、そしてこの世界だけが真実だったことを知るために私は生まれてきて、これまで生きてきました。この世界だけが私たち人類が本当に求めてきた世界だったこと、私たちは本当はこの世界から生まれてきた意識だったこと、だからそこに帰るだけだったこと、それが最終的な人類救済の道でした。そのためには形の世界の総崩壊しかない、つまり宇宙的規模の天変地異しか人類救済の道はないということです。だから天変地異は喜びです。

人類は今差別区別の中で、殺したり殺されたりの戦いの中で苦しんでいます。天変地異は裕福な人も貧しい人も戦争で苦しんでいる人もいっしょくたに飲み込んで、みんなを愛の世界へ誘導していきます。この人類救済の最終的なシナリオを、今私ははっきりとわかりました。天変地異はこの学びの門を叩いてからずっと示されていたことなのに、今ようやく自分の中で納得できました。三十年かか

りました。それだけ肉の思いが強かったということです。己れ偉しが強かったということです。ああ、うれしいです。心を見ながら、常に喜びのほうに心の針が向いているかどうかを確認しながら私は歩いていくだけでした。それは肉がなくなってからもずっとずっと続いていきます。

二五〇年後、田池留吉氏はアメリカニューヨークに大きな財力を背景にしてアルバートという名前で再び肉を持ち、今世の続きの仕事を成し遂げていきます。それは次元移行という仕事です。そこには塩川香世さんをはじめ今世一緒に「意識の流れ」を学んできた意識が結集して、約五十年の時を経て、人類は全く肉を持たない、次元の異なる世界へ移行していくというのが「意識の流れ」のシナリオです。今世はその予行演習です。

私自身について言えば、二五〇年後のことは実感としてわかりません。自分の意識が二五〇年後に果たしてアルバートのもとに結集できるのかどうかもわかりません。まだまだ自分の心を見て、出てくる肉の思いを意識の世界へ返していく

という作業を地道にやっていくしかないと思っています。その作業を喜んで、順調に継続できるかどうかで、私自身の今現在から二五〇年、三〇〇年後へのシナリオが決まるのだと思います。その道は簡単ではなく、厳しく険しいと言われています。私たちはすぐ肉に走る心癖が強いからです。しかしだからと言って、僧侶が苦しい難行苦行を重ねるというイメージではなく、「心を見る」という作業は、本来はチョウチョが自由に楽しそうにひらひらと花から花へと飛んでいるようなうれしい作業なのです。だってそこには喜びしかないのですから。それが人間本来の自然の姿なのですから。

今日は五月三日、まだウクライナでの戦争は続いています。先日国連のグテーレス事務総長がようやく重い腰を上げて、プーチン大統領、ゼレンスキー大統領と個別に会談し、マリウポリの製鉄所の地下に二か月間も避難し続けている市民を、国連と赤十字国際委員会が関与して安全なところへ移動できるように手配を

してくれたけれど、五月一日約一〇〇人の人が移動できたところでまたロシア軍の砲撃が始まり、中断せざるを得なくなったという。製鉄所の地下には一般市民のほかに負傷した兵士もたくさんいて、食料や水もなくなり地獄のようなひどい状態だと、ウクライナ軍側のアゾフ大隊の副司令官は語っていた。戦争の過酷な状況は続いています。

昨夜ＮＨＫで、戦禍のウクライナに留まり、状況をＳＮＳで発信し続けている人たちの声をそのまま伝えるドキュメンタリー番組がありました。キーウ郊外の空港の近くの村に住んでいるという女性は、「最初は死者の写真を見ると気分が悪くなったけれど、今は何百枚もの死者の写真を見ても、何の感情も湧き上がってきません。怒りすら湧いてきません。戦争が始まる前は人を殺すのを見ることができなかったけれど、戦争が始まってからは、必要であれば私は軍隊に入ることもできるし、人を殺すこともできます」と、能面のような冷たい表情で語っていた。また、アメリカへ留学していたが、戦争が始まってからすぐパートナーと

一緒に帰国し、救援物資を各地に配るボランティアをしている二十九歳の青年は、「最初はこのままボランティアを続けるか入隊するか迷っていたけれど、僕は入隊して戦う」と決意を述べていた。これが戦争なのだと思った。戦争は誰でも避けたい。戦争は悪だと誰でも知っている。しかし実際に戦争を仕掛けられて周囲に死者が増えてくると、自分も戦おうという気持ちになるのが人間の本能なのかも知れないと思った。私だってロシア軍の装甲車と戦車の隊列を、誰かドローンや戦闘機で上から爆撃して一網打尽に破壊してしまえばいいのに、という気持ちが湧いてくる。闘いの本能はおそらく誰にでもあって、条件が揃えば表に出てくるということなのだろう。

今田池留吉、アルバートの意識、母の温もりに心の針を合わせて戦場の近くにいる人たちの意識を聞いてみる。

なぜこんなことになったのか。なぜこんな悲劇が起きたのか。何の罪もない人た

ちが、昨日まで普通に日常生活を送っていた人たちが、なぜ殺されたり傷つけられたりしなければならないのか？　私は死ぬのが怖かった。殺されるのが怖かった。でも今は怖さよりも憎しみのほうが強くなった。死ぬことも怖くなくなった。とにかくあいつらをやっつけたい。あいつらを殺したい。あいつらを殺すためだったらなんでもする。戦え、戦えと、中から湧き起こってくる。

一方で、ここで戦っても何にもならないことも知っています。仕返しをしても、憎しみの連鎖が広がるだけ、悲劇がますます拡大していくだけで、何にも解決しないこともわかっています。

ああ、お母さん、私たちは殺したり殺されたりするために生まれてきたのではなかったはずです。私たちは何のために生まれてきたのですか。

ああ、お母さん、今あなたを呼ぶと、何かじわっと温かさを感じます。あなたの優しさがふわっと体を包みます。私の中の憎しみが、闘いのエネルギーが徐々に消えていくのが感じられます。これは何ですか？

「あなたは愛です。あなたは愛です」という声だけが聞こえる。「どんな状況でも、どんなに悲惨な悲劇と思われる状況でも、あなたは愛の中に生まれてきたことだけは忘れないで下さい」

私はお母さんの無償の愛の中に生まれてきました。あなたの子宮の中で私は喜びだけで存在していました。誰かを憎むことも恨むことも知りませんでした。私はあのころに帰りたい。穏やかで安らいでいた時間と空間の中に喜びだけで存在していたあのころに戻りたい。

これからこの戦争が収束していくのか、まだまだ続いていくのかわからないけれど、そして私はこれから何を決断し、どう行動していくのかわからないけれど、今感じたお母さんの温もりだけは忘れずに生きていきます。私に心を向けて下さってありがとうございました。

田池留吉氏は、「人類は三億六千年前にこの地球上に肉を持ってから、ずっと

ずっと闘いの歴史を繰り広げてきました」とおっしゃいました。三億六千年？何で六千万年ではなく六千年なんだ？　ダーウィンの進化論と矛盾するのじゃないか？　とかいろいろ疑問が出ると思います。ダーウィンの進化論が間違いとかではなく、生物学的にはそれは正しいのでしょう。田池留吉氏は生物学的な見地からこういう数字を提示しているのではなく、全く次元の違うところから、つまり意識という世界から人間を見ているので、三億六千年を科学的に説明しろと言われても無理です。ただそのまま信じるしかありません。もちろんこんなこと突然言われても、十中八九ほとんどの人は信じないでしょう。ふんと鼻であしらわれるのが現実だと思います。私はそれを承知で話を進めてみます。先日ＮＨＫの何かの番組で地球上に生命が誕生してから四十億年、人間が誕生してからは四億年と言っていたので、地球の歴史から見ても三億六千年という数字は、あながち突拍子もない数字ではないような気がします。

さらに田池留吉氏は、「人間が地球上に誕生する前にも肉を持たない暗黒・漆

黒の宇宙時代があって、そこでもすさまじい闘いを繰り広げてきた」とおっしゃいました。その暗黒・漆黒の宇宙時代については、塩川香世さんをはじめたくさんの学びの友が証明して文字に表しています。私自身はあまりピンとこないので、ここでは省略します。でも暗黒・漆黒の宇宙時代はわからなくても、自分の中に息づいてきた生きていることの苦しさ、寂しさ、悲しさは、多分この宇宙時代から引きずっているんだろうなあというのだけはわかります。

とにかく田池留吉氏の出現によって愛に目覚めた意識たちのエネルギーが、人類の闘いの歴史も、その前の暗黒・漆黒の宇宙時代も、真っ黒から真っ白に変えていきます。私たちは今その転換期に生きているんです。これからうれしいうれしい壮大なドラマが展開されていく。私たちは視聴者でも傍観者でもなく、一人ひとりがそのドラマの主人公なんです。映画やテレビドラマには主役と脇役、ちょい役、エキストラなど、ピンからキリまであるけれど、この次元移行へのドラマには差別区別はなく、主役も脇役もなく、みんなが一人ひとり光輝くスポットラ

イトを浴びて、みんな一緒、みんなひとつ、みんな喜びのなかにひとつになって、永遠無限に広がっていきます。

「お母さんの温もり」がすべて答えてくれます

ここでした。ここが私がずっとずっと求めてきた世界であり、それはただ気が付けばいいだけでした。素直になって「お母さん」と呼べば、私の中の「お母さんの温もり」がすべて答えてくれます。「お母さんの温もり」は、私の中の差別区別も、人を憎む思いも、そこから来る苦しさも寂しさも悲しさもすべて溶かして、「あなたは愛です。あなたは喜びです」という思いだけを伝えてくれます。無条件に広がってくる喜び。何かじわっと「ああ、うれしい」という思いが湧き起こってきます。

私には、今の時点ではここまでしかわかりません。今心に感じている喜びが本物かどうかは、これからの日常生活で、さまざまな場面で、私自身の死の間際まで検証されていくのだと思います。もし本物だったら、「私は愛です。私は喜びです」が私の中で無限大に広がり、波動として流れていくでしょう。その波動は、自分だけは特別、己れ偉しの波動ではなく、「あなたは私、私はあなた、ひとつです」という優しい、優しい波動です。何も言葉や態度に表さなくても、自然に流れていく波動です。田池留吉氏は「波動の世界だけが真実の世界です」とおっしゃいました。本当のものは、真実は、目に見えないということです。

五月十二日の時点で、マリウポリの製鉄所にいた市民は全員避難できたとのこと。残っているウクライナ軍のアゾフ大隊を全滅させようと、ロシア軍は攻勢を強めているとのこと。今日の夜七時のＮＨＫのニュース番組の中で、「死が差し迫っている。毎日今日が最期かと思う」と、頬がこけ死人のように白い顔をした

ウクライナ軍の中尉が語っていた。私たちはここでも、銃弾や砲撃を受けて片足や片腕を失ったり大けがをしている兵士がたくさんいる野戦病院のような中で、今にも殺されようとしている人たちを黙って見ているしかない。

お母さん、同じ地球上に生きているのに、なぜ人間は仲良くなれないんですか。人間はなぜこんな残酷な闘いを続けるんですか。

本来の私たちは愛です。あなたも愛です。私も愛です。私たちは愛の中にひとつです。私たちは愛しか知らなかった。それはマリウポリの製鉄所の中で瀕死の状態にいる兵士たちも、そこにミサイルや砲弾を撃ち込んでくるロシア兵も、この戦争を始めた極悪人プーチンも、そしてこの平和な日本で夕食を食べながら悲惨な戦争の状況をテレビで見ているあなたも同じです。意識はひとつなのです。

人類は三億六千年、今地球上に起きていることを繰り返しやってきました。つ

まり闘いは絶えることがなかったのです。今地球は瀕死の状態です。肉が自分だと信じた人類が流し続けてきた欲とエゴと無知のすさまじいエネルギーが、自然を破壊し続け、人間の心をむしばみ続け、憎しみや恨みを増長し続け、もうどうにも修復できないところまで地球を傷つけてきました。ウクライナの状況はそのひとつの象徴です。

どうぞ、本当の愛に目覚めた人から、今戦場で苦しんでいる人たちに本当の愛を流していって下さい。ウクライナの人たちだけではなく、戦いを命令されたロシア兵にも、戦いを命じたプーチンにも「あなたは愛です」と呼び掛けていって下さい。真実は波動で伝わります。今ウクライナを支援している世界中の人々は、「私たちはウクライナとともにあります」とよく口にするけれど、「ともに」は敵、味方に分かれて闘うためにあるのではなく、敵も味方もないすべての人々、すべての意識のためにあります。

「私たちはともに愛です。ともに喜びです。私たちはともに愛を広げていきます。

ともにこの道をまっすぐ歩いていきます」

ああ、お母さん、私の心の中にすべてがありました。愛も憎しみも恨みも闘いも許しも悲しみも喜びもすべてがありました。私は自分の心を見ていくだけでした。私は自分の心を見て、マイナスの思いをプラスの思いに変えていくだけでした。

ようやく結論に近づいたようです。太平洋戦争を兵隊として体験した父の手記の感想文を書くことは、ウクライナで起こった現在の戦争を通し、太古の昔から続く人類の闘いの歴史を実感することであり、その闘うことの苦しみや悲しさを自分の中で愛と喜びに変えていくことでした。

いつもズームで一緒に学んでいる友は、「プーチンは私だ」と言いました。そうです、私たちは今世だけではなく、この三億六千年の間に何万、何千と転生を重ねてきているから、プーチンのように「我こそ頂点に立つ者、皆我の言うこと

を聞け」と、独裁者だった時の過去世を持つ人もいます。そんな独裁者でなくとも、私たちが日常生活において、身近な家庭や職場で「自分が正しい。間違っているのはあなただ。私の言うことを聞きなさい」と、自分の考えを押し通そうとする時、プーチンと同じ波動が流れています。反対に拷問や処刑で命を亡くした人もいて、その時の恐怖がよみがえる人もいるでしょう。とにかく私たちはニュースやドラマを見て、いろいろな感情が湧き起こってくるのは、皆過去世においてそういう場面を経験しているからです。私たちは過去から未来へと続く永遠の意識の流れの中に生きているから、今現在の心を見て、過去から続く苦しみや悲しみ、恨みや呪いなどのマイナスの思いをプラスに変えていけば、過去も現在も未来もすべての意識の流れがプラスに変わっていきます。

セミナーというと、講師の方がプロジェクターを使って説明して、それについて質疑応答するという形を想像するでしょうが、心の学びのセミナーでは、もち

ろん講話の時間もありましたが、現象という時間が長く取られていて、すべてが許されている波動の中で、自分の意識の世界をそのまま出してそれを検証していくという勉強が主でした。敏感な人はギャーギャーわめきながら転げ回ったり、「くそっ、田池死ね!!」と田池留吉氏に挑みかかっていく人もいます。グワーッと地獄の底から出てきたような声を出して阿修羅のような形相で戦う仕草をする主婦もいます。初めて参加した人でびっくりして帰ってしまう人もいるくらいです。しかし田池留吉氏が「ありがとうございました」と声をかけると、一斉に元の普通の人たちに戻り、自分の心の中のいろいろな思いをストレートに出せたことを喜んでいました。

田池留吉氏は、「皆さんは私を殺しにここに来てるんですよ」とおっしゃいました。もちろんそれは意識の話です。肉で生きているということは、田池留吉の意識の世界に闘いを挑むことだったのです。私たちは競争社会の中で比較競争しては、「勝った」「負けた」と優越感を持ったり反対に劣等感を持ったりして生き

ています。みんな本当はそんな社会から解放されたいのに世間ではみんなそうだからと、趣味や娯楽や飲食で自分をごまかしてなんとか生き延びているのではないでしょうか。プロ野球やサッカー、バスケットボール、ボクシング、相撲…熱狂的なファンは、ひいきのチームや選手に自分の闘争心を託して代理戦争をしているような気がします。

とにかく私たちは男性も女性も関係なく、「闘い」が好きです。そんな闘いの意識が田池留吉氏の愛の波動の前ではむき出しのまま、「くそっ、田池」と出てくるのです。田池留吉氏は無防備のままそこに立っているだけでした。無防備のまま、何を言われても、首に手をかけられても「あなたは愛です」と、返ってくるだけなんです。その波動は「お母さんの温もり」そのものです。そこで田池留吉に闘いを挑んだ意識はへなへなと崩れ落ち、自分が間違ってきたことに気が付くのです。なぜなら自分も愛だからです。愛だから田池留吉の愛に反応するのです。田池留吉氏は「あなたも私とご同様ですよ。あなたも愛、私も愛、ひとつで

す」と常におっしゃいました。田池留吉氏は上からもの申したり、教えを授けたり、愛を施したりするのではなく、「本当の私たちは意識です。愛です。エネルギーです。みんな一緒です」と、ただただ優しい波動を流しているだけでした。

ようやくゴールまで来ました

五月十二日の夜七時のニュースでは、マリウポリの製鉄所にこもるアゾフ大隊の兵士たちの瀕死の状態を報じる映像と同時に、そのアゾフ大隊の兵士の妻だという二人の若い女性がバチカン市国のフランシスコローマ教皇を訪ね、「あなたが私たちの最後の望みです。私たちの夫の命を救ってほしい」と泣きながら訴える映像も流れていた。「教皇は私たちのために祈り、あらゆることをしているとおっしゃって下さった」と、妻たちは話していた。教皇は困惑していたのではないか

と思う。もし本当にキリスト教の神がいて、いつも世界の平和を祈っているのならばこんな戦争は起きないはずだ。もともとロシアの人々もウクライナの人々もロシア正教という同じ宗教を信じていたという。本当に神がいるのなら、神はそれぞれの国で自分たちの都合のいいように教えが解釈されたり仲間が分裂したりすることは望まないはずだ。ましてや同じ信者同士が戦争をするなんてもってのほか。何が平和の祈りか。特にプーチン大統領の後ろ盾になっているキリル総主教という人は好戦的な人で、プーチンを操っているかも知れないとのこと。聖職という仮面をかぶった欲とエゴ丸出しのサターンなのではないか。

田池留吉氏は世界中から宗教がなくならない限り、人類の平和は訪れないと最初からおっしゃっていました。外に神を求めて祈ったり祀ったりしなくても、私たちの中にはこんこんと湧き出る愛の泉がある。私たちはもともと愛から生まれて愛に帰る意識なのだからとおっしゃいました。私たちの中にある愛は無限です。自由です。こうでなければならないという戒律に縛られることもありません。だ

から本物なんだと思います。

ふと私の中に浮かんできた映像です。昔、ソフィア・ローレンとマルチェロ・マストロヤンニ主演の『ひまわり』という、当時ソビエト連邦に属していたウクライナがロケ地になった映画がありましたが、広大なひまわり畑の迷路を、自分は肉だと思っている人間たちが、あっちへ行ったりこっちへ行ったり出口を求めて歩き回っている場面を想像して下さい。自分より背の高いひまわりに囲まれて上を見てもほんのわずかな空しか見えない。ここだとねらいを定めて突き進んでも行き止まりになり、また引き返しては別のルートを辿っていく。歩いても歩いてもとうとう出口が見つからず行き倒れになる人もいるでしょう。ようやく出口を見つけられた人は一歩外に出たら、そこにはどこまでも続く緑の平原と真っ青な空が広がっている。燦々（さんさん）と輝く太陽の光が「お帰り」と温かく迎えてくれる。ここが意識の流れの世界。ずっとずっと永遠にそこにあって永遠に変わらない愛

の世界。これは架空の世界ではなく、現実にある世界なんです。私には信じられます。

ちなみに『ひまわり』は一九七〇年の作品で、イタリア・フランス・ソビエト連邦・アメリカ合衆国の合作とのこと。アメリカ人もロシア人もヨーロッパの人々もみんな仲良く協力してこの映画を作ったんですね。もし、今真実の愛に目覚めた人たちが映画を創るとしたら、どんな映画になるんだろう。

娘が十九歳大学一年の時、岐阜県下呂で行われたセミナーに参加する機会があり、田池留吉氏からワンポイントメッセージを受けていました。ピアノをやっているという娘に田池留吉氏は、「あなたは今世の中に出ている芸能人や有名人のようにパワーを求めなくても、ただ喜んでピアノを弾いたり歌を歌っていれば、それだけでいいんですよ。それだけで人の心を癒(いや)していくんですよ」とおっしゃっていました。残念ながら娘はそのメッセージを心で納得する前に、音楽の世界で繰り広げられているすさまじい闘いの中で自滅していきましたが、やっぱり音楽

や映画や演劇が好きな私は、お金や権力に汚染されていない、純粋に、ただただ喜んで音楽を奏で、舞台や映像を創る人たちがいたら、その人たちを応援し、その作品を楽しんでいきたいと思う。

五月十七日、マリウポリの製鉄所にこもっていたウクライナのアゾフ大隊の兵士が重傷者も含めて二六五人全員が、ドネツク州の親ロシア派の施設に移動したとのこと。ロシア軍からしたら〝投降〟であり、ウクライナ軍からしたら〝戦闘任務終了〟とのこと。その裏にはロシア兵の捕虜との交換など上層部の取引の話し合いがあったのかも知れないが、とりあえず瀕死の状態の兵士たちが助かってよかった。私にはロシア兵もウクライナ兵も同じように見えて、お互いに「助かってよかったね」とねぎらい合っているようにも見える。そこには憎しみや敵対心は感じられない。「なんて俺たちは馬鹿なことをしたんだろう」と後悔しているような表情が見られる。末端で戦っているロシア兵は本当はこのまま戦闘をやめ

たいのではないだろうか。「もうやめましょう」と末端のロシア兵とウクライナ兵が握手するのはどうだろうか。そこから愛の波動が流れ、それが大きなうねりとなって上層部まで流れ、そしてプーチンまで届いて、プーチンの愚かで頑(かたく)なな闘争心を氷解していったらいいなあと、私はまた夢想している。闘いを止めるのは核兵器や強力な武器ではなく、愛の力です。無防備なまま、ただそこに立っているだけのお母さんの温もりです。

ようやくゴールまで来ました。一月末から書き始めてここまで約四か月かかりました。今私の心の中には過去から未来へと永遠に続く意識の流れが、この五月の風のようにさわやかに軽やかに流れていくのが感じられます。文章を綴るというのは心を見ることでした。

この文章を綴るきっかけを作ってくれたお父さん、ありがとうございます。そして文章を綴るよう導いて下さった内城先生、ありがとうございます。私はこの

文章で、太古の昔から現在まで続く自分の中の闘いの心を確認することができました。そしてその闘いの心は、私の中に最初からあった母の温もり、愛に全部吸収されていくことも確認できました。

私はこの文章を二五〇年後の自分への手紙として残したいと、今この瞬間、思いました。ああ、私は二五〇年後に必ず心を繋いでいきます。たくさんの天変地異を経て、本当の愛の世界へ帰ります。私は今世生まれてこれて本当に幸せでした。ありがとう、お父さん。ありがとう、お母さん。私は愛です。私は意識、永遠、無限、波動、エネルギーです。

おわりに

最後まで読んでいただいてありがとうございます。

「はじめに」に記したように、私は最初からこのような本を書こうとは思っていなかったので、本の出版に必要な「伝えたいこと」や全体の構想などは全く考えていませんでした。ロシアによるウクライナ侵攻勃発からその経過を記録しながら、その都度出てきた思いをとりとめもなくそのまま綴ることによって、結果として、私は自分で納得する結論に辿り着くことができました。最後の「闘いを止めるのは核兵器や強力な武器ではなく、愛の力です。無防備なまま、ただそこに立っているだけのお母さんの温もりです」という結論が私の「伝えたいこと」でした。こんな本の作り方もあるんだと、私は自分でもびっくりしています。もち

ろんこれから世界各国のリーダーたちは、お互いに牽制し合ってますます軍事力を強化していく流れになっていくのでしょうが、それでも私はずっとずっと永遠に、すべての意識に「あなたは愛です。私も愛です。ひとつです」と、心で呼びかけていきます。

この本を読んで、共感する人、反発する人、違和感を覚える人、不思議に思う人、いろいろいらっしゃると思いますが、どんな感情であれ何かを感じ、「心を見ること」に興味を持っていただけると大変うれしいです。

今日は七月二十一日、ロシアによるウクライナへの攻撃はまだ続いています。日本では新型コロナウイルスの第七波が到来し、感染者が過去最多を更新しています。また毎日のように、全国のあちらこちらに線状降水帯が発生し、頻繁に記録的短時間大雨情報が流れ、避難指示が出る時もあります。堤防が決壊して川の水があふれ、家が浸水したり甚大な農業被害も出ています。ヨーロッ

パやアメリカテキサス州では四十度を超す熱波が襲来して、熱中症による死者が増大し、山火事も頻発しているとのこと。七月八日、安倍元首相が選挙演説中に銃撃されて死亡するという、銃規制の厳しい日本では前代未聞の事件も起こりました。

気候変動は地球温暖化が原因だということがわかっていても、人類が何百年も何千年もかかって汚して破壊してきた地球の自然をすぐには元に戻せないことは誰にでもわかります。何か事が起きるたびに、どの国の政府も国際機関も、その対処法しか対策を講じることができません。「何かが変だ」「人類のあり様をもう一度考え直す時に来ているのではないか」と、心ある人たちは疑問を投げかけていますが、コロナにしろ気候変動にしろ、人間がどんなに知恵を絞って最先端の技術を駆使しても、人智ではもうその勢いを止められないことを皆さんうすうす気づいているのではないでしょうか。私たちは「人間こそ万物の霊長」だと、自分たちの英知を誇り、科学技術を進化させ効率的で豊かな生活を築いてきました

が、それが最終的に自分たちの首を絞めることになるなんて、誰が想像したでしょうか。

卑近な例で申し訳ないのですが、私は二年前から夏は農家さんの所で野菜や果物の収穫、選果、出荷などのアルバイトをやらせてもらっています。農作業に不慣れな私、かえって農家さんには迷惑だったのでは？という後ろめたさを覚えながらも、私にとっては、一粒の小さな種がすぐ芽を出し苗ができ、やがてその苗が大きくなって実を結び、市場に出て私たち人間の肉体細胞を支えてくれているんだということを自分の目で確認できて、本当に感激しました。農業こそ、人間が生きていくのに一番根幹となる大切な仕事だと心の底から思いました。しかしそこにも差別、区別のやりきれない現実を見ました。一粒の種、一本の苗、みんな同じように見えても、土や肥料によってもその成長過程に差が出て、実になって農協に出荷される時は大きさ、形、色などでランク付けさ

れ選別されていきます。出荷の基準に満たないものは別のところへ回されたり捨てられたりします。味も栄養価も変わらないのに、見た目で選別されて「お金にならない」と捨てられていく野菜や果物たち、私には今の人間社会を象徴しているように見えました。

捨てられる農産物を今世界のどこかで飢餓で苦しんでいる人たちに食べてもらえないのか、いいえ海外まで持って行かなくても、この日本で今食べるものがなくて困っている人の手元に持っていくことはできないのか。現にＮＰＯ法人などで、家庭や企業で不要となった食料を集めて困っている人たちに配布する活動をしている団体もありますが、一部の人たちの活動には限界があります。いっそのこと社会全体のお金優先のルールを取っ払ったら、お金がなくてもみんなに平等に食べ物が行き渡り、みんな仲良く生きていけるのにと、私はまた夢みたいなことを考えてしまいます。

お金優先は私たちがつくった社会です。目に見える社会はいろいろな制約、ルー

ルのもと差別、区別の社会です。闘わなければ生きていけない社会です。苦しい社会です。苦しい苦しい「金と神と権力」に狂った自分たちだったから、今世初めて意識の世界から田池留吉氏が、「私たち人間の本来の姿は目に見える肉ではなく、目に見えない意識、愛、喜びです。初めに意識ありきです」と、肉を持って来てくれたのでした。それもこの日本に。アメリカやロシアや中国でもなく、ヨーロッパでもなく、ましてやアフリカや中東でもなく、なぜこの日本に肉を持って来てくれたのか。そして二五〇年後に、なぜアメリカニューヨークに再び肉を持って来てくれるのか。それには大きな大きな理由があります。それを語るには、また本が一冊できるくらい長い長いお話になりますので、「田池留吉」「心を見る学び」に興味のある方は、ネットで「ＵＴＡブック」と検索してみて下さい。そこにはたくさんの資料が紹介されています。

最後にこれも唐突で申し訳ありませんが、この岩手に生まれて、千載一遇のチャ

ンスで田池留吉氏に巡り会えたおかげで、ずっとずっと多分前世から求めてきた真実の世界を知った私は、過酷な自然環境の中では神や仏にすがるしかなかったであろうこの地で田んぼや畑を耕して生きてきた人たちを思う時、どうしても宮沢賢治という人が浮かんできます。最後に宮沢賢治さんへの手紙という形で、この本を締めくくらせていただきます。

賢治さん、正直言って私はあなたの童話や詩を読んでもあまりピンときませんでした。生物や化学や物理、理科系が全くだめな私はあなたの使う言葉がまるで外国語のようで、頭に入ってこないのです。イメージが全く湧いてきません。『銀河鉄道の夜』にしろ、『グスコーブドリの伝記』にしろ、どこがおもしろいのかさっぱりわかりません。唯一『雨ニモマケズ』にだけは共感を覚えます。人間の究極の理想形、こんな人に私もなりたいと思ったこともあります。特に「ミン

ナニデクノボートヨバレ　ホメラレモセズ　クニモサレズ」が最高です。常に人の評価を気にして小さく小さく縮こまっている自分にとって、誰にどう思われようと、「こうでなければ、こうしよう」と、自分が理想とすることをのびのびと実践できたらどんなにいいだろうと思うのです。

さて、そんなに好きでもないあなたになぜこんな形で手紙を書こうとしているのかと言うと、コロナ騒動が始まる前だから三年か四年前伊勢志摩のホテルで行われたセミナーの二日目の朝食時、今まで言葉も交わしたことがなかった他県の男性の学びの友から唐突に、「この学びを宮沢賢治に伝えて下さい」と言われていたのです。ずっとその言葉が宿題のよ

うに私の心に残っていたのですが、今回偶然このような形で本を出せることになって、そうだ、最後に宮沢賢治に向き合い語り掛けることによって、あの宿題を完成できると同時に、自分がなぜこの岩手に生まれてこの学びに出会ったのか、その意味もわかるような気がしました。それと、この本を書くきっかけとなった蔵で見つけた新聞に、昭和八年の一月、二月、三月の日付の新聞があって、その年の九月二十一日に亡くなったあなたもこの岩手日報を見ていたかも知れないと思うと、なんだかあなたが身近な存在に思えたのです。

あなたに関する本がちゃんと家にありました。昭和五十九年一月発行の『國文學』という専門誌が残っていました。テーマが「賢治詩の宇宙」。小さな細かい字であなたの○歳から亡くなるまでの評伝、主な作品の解説が書かれてあり、興味のあるところを読んでみました。何篇かの童話も読み直してみました。「ああ、この人には田池留吉の世界が伝わる!!」と思いました。あなたの赤ちゃんのような純粋な心が伝わってきました。私は頭であなたの作品を解釈しようとし

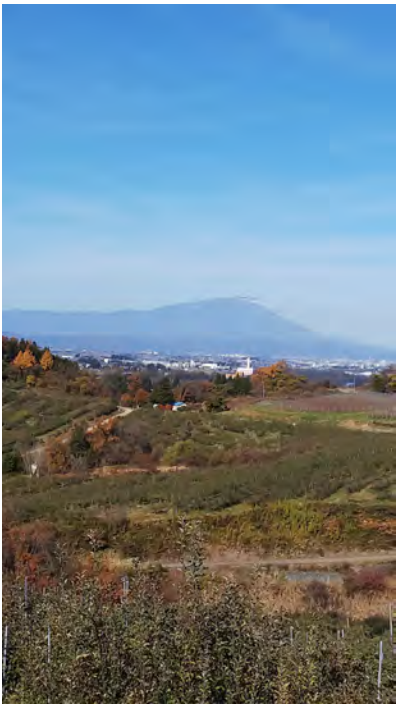
たから、さっぱりわからなかったのでした。

あなたは本当に優しい人ですね。面積は四国四県に匹敵するくらい広いけれど、山ばっかりで耕地は少なく、冷害、凶作、飢饉にたびたび見舞われ、津波や地震なども多いこの岩手の人々を救いたい、特に農民の生活を少しでも豊かにしてあげたいと、自分の命を削ってでも奮闘した賢治さん、その生き方に共感する人も多いでしょう。全国に熱狂的な賢治ファンが多いこともうなずけます。

しかし、賢治さん、今あなたは幸せですか。あなたが理想とした法華経によって、あなたは死後救われましたか。生きている間は、目に見えて耳に聞こえる世界では、心や宗

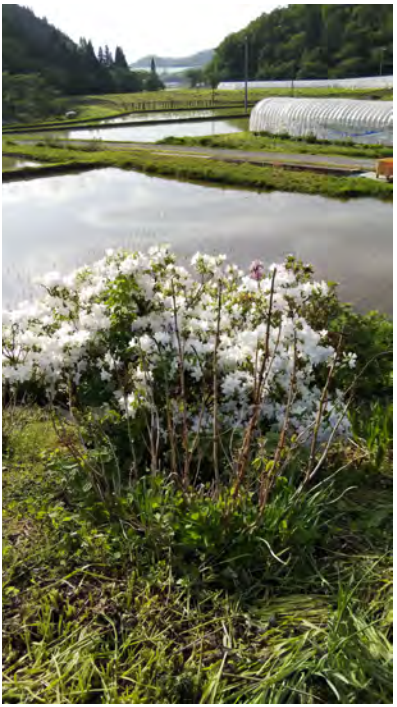
教の世界を言葉や形でなんとでもきれいに美しく飾ることができます。しかし、肉体がなくなったら、つまり死んだら、その実体が明らかになります。あなたは「人は誰でも平等に成仏できる」と唱えた日蓮上人に会うことができましたか。あなたは成仏できましたか。そこに仏はいましたか。何にもなかったのではないですか。釈迦も日蓮もいなかったのではないですか。光に満ちたきれいなお花畑などなく、ただ真っ暗な闇だけが広がっていたのではないですか。その中であなたは小さく小さく固まっているのではないですか。

私もこの岩手の農村地帯に生まれて、朝から晩まで真っ黒になって働く農家の人たちを見てきました。人間にとって一番大切な食を支えている農業に携わる人たちが、昔から支配階級の人たちに搾取されて貧しい暮らしを強いられ、戦後民主主義の世の中になったとは言え、重労働と家長制度の名残に縛られて、農家というと暗いイメージでとらえられることを、私はいつも悲しい思いで見ていました。賢治さんが生きていた明治の終わりごろから昭和初期の時代の農家は



もっともっとひどかった。だからあなたの苦しみ、悲しみ、農村を変えようとしたこと、実際やったこと、よくわかります。「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」と、岩手にイーハトーブ＝理想郷を築こうとしたことはすごいことだと思います。賢治さんが亡くなって九十年、日本は大きな戦争を経て、一見平和で豊かな社会になり、農家の人たちの暮らしも、あなたが心血をそそいで研究してきた土地改良、品種改良、肥料改革が進んで豊かになりました。農作業も機械化されて随分楽になりました。今まで農業を知らなかった若い新規就農者も少しずつ増え、賢治さんがつくった芸術も楽しむ羅須地人協会のような集まりもあります。

しかし、一見形は豊かになっても人間の本当の幸せは、形の世界にはないことを今世初めて私たちは知りました。形の世界は差別・区別の世界です。人間の苦しみの根源は差別・区別の中で闘わなければならないことでした。「闘いの世界」はいつかは必ず崩壊していきます。そしてその崩壊の足音がだんだん大きくなってきました。だから今「私たちの本当の姿は意識です。愛です。喜びです」と、「意識の流れ」の世界からの促しがあったのです。本当の幸せ、本当の安らぎは、宗教や哲学、思想に求めなくても、初めから私たち一人ひとりの心の中にありました。そのことが自覚でき、わかったなら、その人から自然に流れてくる愛の波動によって、宇宙全体の意識が変わっていき、それが世界全体の、宇宙全体の平和の実現ということにつながるのでしょう。つまり、あなたが提唱したことは真逆で、「個人一人ひとりが幸せになれば、世界全体が幸せになる」ということです。闘って争って苦しんで獲得する平和や幸せは嘘です。偽物です。「宇宙」とか「四次元」とかいう言葉を駆使して詩や童話を書いているあなたには、「母

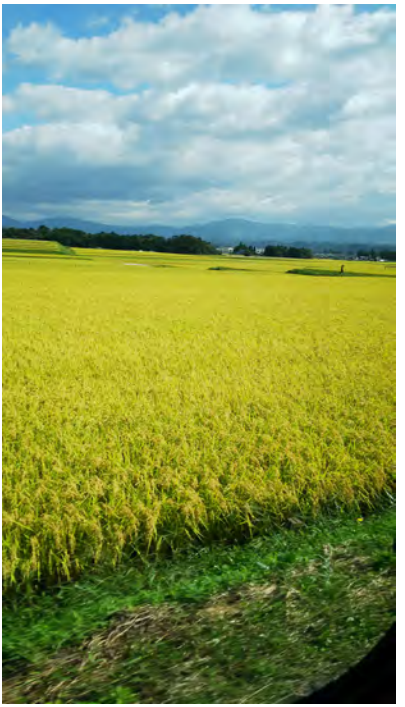


なる宇宙」とか「四次元への移行」ということがすぐイメージできますよね。宗教の世界には真実はなかったことを知ったあなたには、「意識の流れ」の真実がすぐ届くでしょう。私は心を見ながら、心の針がちゃんと田池留吉に向いているかを常に確認しながら、あなたに呼びかけます。「ともにともに、喜びでこの次元を超えていきましょう」と。

ああ、賢治さん、私は今この瞬間、あなたと同じこの岩手に生まれて良かった、幸せですと思えました。あなたに田池留吉のことを伝えられてうれしいです。私には「母なる宇宙」の本当の姿がまだよくわかりません。その入り口にようやく辿り着いたばかりです。でもこれからはあなたも

一緒に、ちょうどジョバンニとカムパネルラのように、ほかのたくさんの乗客（意識）とともに銀河鉄道に乗って「母なる宇宙」への旅に出発できることが本当にうれしいです。もうカムパネルラがいなくなることもありませんよ。そこには肉の生も死もありません。私たちは意識として永遠に、この愛と喜びと安らぎしかない「母なる宇宙」を旅していくのです。私は賢治さん、あなたの意識に呼びかけながら「意識の転回」を果たしていくために、この岩手に生まれたのかなと、今思えました。「宮沢賢治にこの学びを伝えて下さい」と促してくれたYさん、本当にありがとうございます。

この岩手は確かに耕地の少ない、自然災害の多い貧しい土地でした。でもそこに生きてきた人々は賢治さん、あなたのように心豊かな人が多いです。親の言われるまま嫁に来て、朝早くから夜遅くまで農作業をしながら子供を産み育て、舅、姑、夫に仕え、逃げたくても逃げられなかった農家の嫁として生きてきた人たちの話を、私は今まで一緒に泣きながらたくさんたくさん聞いてきました。



母と同じくらいの年齢の方はもう亡くなった方も多いですが、どんなに苦労をしても、なぜか皆さん優しかった。純粋でたくましかった。私はそんな農家の嫁さんたちが大好きです。だから皆さん、幸せになってほしいのです。本当の幸せとは何かを知ってほしいのです。「人生はすべてプラス、喜びです。死も喜び、プラスです」という真実を知ってほしいのです。いつか必ず皆さんにわかる時が来ると信じています。それは嘘、偽りのない真実だからです。

賢治さん、あなたは農学校の教諭時代、生徒に「人が生まれてくるのは、何のために生まれたかを知るためなんだ」と語ったそうですね。あなたは三十七歳で息を引き取る時、「何のために生まれてきたのか」

の答えを出せたのでしょうか。私は「今世生まれてきたのは、田池留吉に出会い、真実を知るためでした」と、はっきり回答できます。

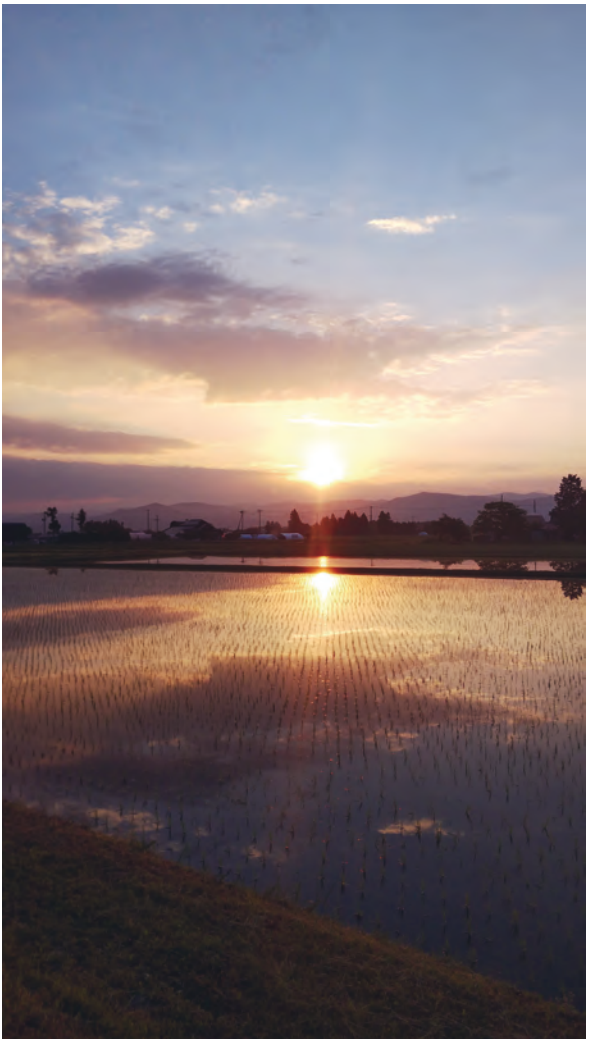
できれば賢治さん、二五〇年後、三〇〇年後に至るどこかで直接お会いし、「私たちが生まれてきたのは、次元移行を果たすためです」という回答を確認し合いたいですね。いつかお会いできるのを楽しみにしております。ありがとうございました。

（写真は、私が農作業の行き帰りに撮ったものです。）

著者略歴
宇田美津子（うだみつこ）
1949 年（昭和 24 年）岩手県紫波郡紫波町に生まれる。
同志社大学文学部卒業。
大阪サンケイ新聞社と東京サンケイリビング新聞社校閲部にて 3 年間嘱託社員として勤務後フリーに。
その後フリーの校正者として 2007 年まで、リクルート、潮出版社、ハーレクイン社、ベネッセコーポレーションなどで出版物の校正に従事。
2001 年帰郷。
2008 年（平成 20 年）より約 10 年間、地元のデイサービスにて生活相談員として勤務。
最近 3 年間は収穫期だけ農家さんでアルバイトを経験。

ごめんなさい　そして　ありがとう

2022 年 11 月 20 日発行

著　　者　宇田美津子
装丁・組版　桐生敏明
発 行 所　編集工房ＤＥＰ
〒 635-0823 奈良県北葛城郡広陵町三吉 345-14
TEL 0745-55-8525　FAX 0745-55-8440
印刷・製本　ネクパブ・オーサーズプレス

ISBN978-4-909201-09-6
© Mitsuko Uda　Printed in Japan 2022